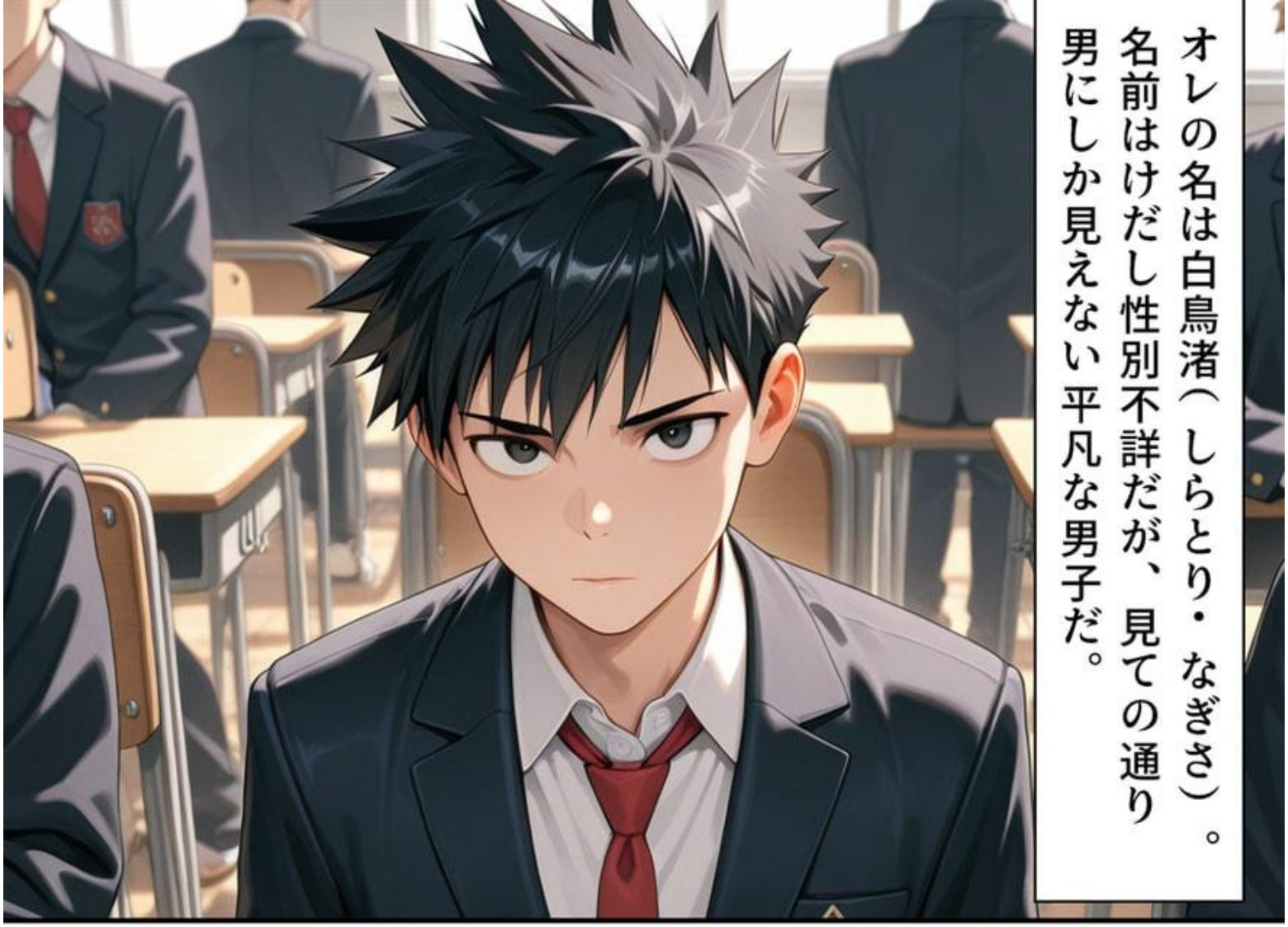
彼女はオレのそばを通りすぎる時に、ふふっと笑った。
濃い化粧に覆われていたが、面影はしっかりあった。

当然だが普段の彼女とは全く印象が異なる。


オレの名は白鳥渚（しらとり・なぎさ）。
名前はけだし性別不詳だが、見ての通り
男にしか見えない平凡な男子だ。

そしてクラスメートでもひときわ
存在感を放つのが、一ノ瀬結花
（いちのせ・ゆいか）だ。

オレは今高校二年生だが、入学当初から噂になっていた。「同学年に『バレリーナ』いるらしいぞ」ってね。

正直最初は「なんのこっちゃ」と思っていた。

一年次はクラスも違っていたので、思わず「見物」に行ってみたが、拍子抜けするほど「タダの女子高生」でしかなかった。要するに趣味…じゃないな…習い事としてやっていたバレエで大きな大会でも好成績を残すほどの実力者ってだけだった。

そもそも「バレリーナ」なんつー浮世離れした存在って本当に実在するのか？なんて思ってた。大体どこに行きゃ会えるのか分からんじゃないか。

お嫁さんなら式場にいるだろうし、女子高生なら学校だ。チャイナドレスは…多分高級中華料理店とか。知らんけど。じゃあバレリーナは？

そう、バレリーナがいるのは、
「舞台の上」だ。

二年生に進学する直前、普通の「ＴＶニュース」で一ノ瀬を見た。外国のコンクールで入賞したんだそうだ。

クラスが違うので伝え聞いた話でしかないのだが、外部のレッスン場に通っているので、授業が終わるとすぐに帰ってそこで練習する日々だったらしい。

学校行事の多くにも参加せず、「日焼けしないように」屋外での体育の授業すら出ていなかった。その特別扱いにやっかむ声もあったらしいが、受賞で全てが変わった。

帰国に一週間かかった後の初登校の日。やっかみが多かったはずの女子も歓迎ムード一色になっていた。
バレエのバの字も分からない男子たちも「クラスに世界的有名人がいる」ってことで途端にちやほやし始めた。

…で…だ。この「バレリーナ」ってのがいい年こいた男にとってはどう対応していいやらものすごく微妙な代物なのである。

あのヘンテコリンな形状…。思わず吹き出しそうになる。

スカートというには余りにも形式的なそれやら、最初から半分…いや全部見えてるパンツ部分などなど。

余りにもユーモラスな形状故に、

男性コメディアンの女装衣装としての印象の方が強いくらいだ。

そうこう言っている内に時は過ぎ、
オレたちは高校二年生になり、クラス
替えが行われた。
学園のバレリーナの話もすっかり
忘れていたところだった。

二年になって隣に机が配置され
たのがあの一ノ瀬だった。一回は
見かけたことがあったのに、すっ
かり忘れていて一週間くらい気が
付かなかった。

隣に座ってりゃそりゃ色々話もする。ある時こう言われた。
白鳥ってさ、あたしにバレエの話とか聞かないよね。

まあ…話たきゃ自分から話すだろうしさ。
全く興味がないといえば嘘になるが、かといって素人が興味本位で聞くのも悪い気がした。

それほど口数の多い方では無い一ノ瀬の話を総合するとこうだ。物心ついた時にはもうバレエのレッスンをしていたという。

自分にとっては当たり前だったが、やはり珍しい存在だったらしく、特に男子には随分からかわれたらしい。

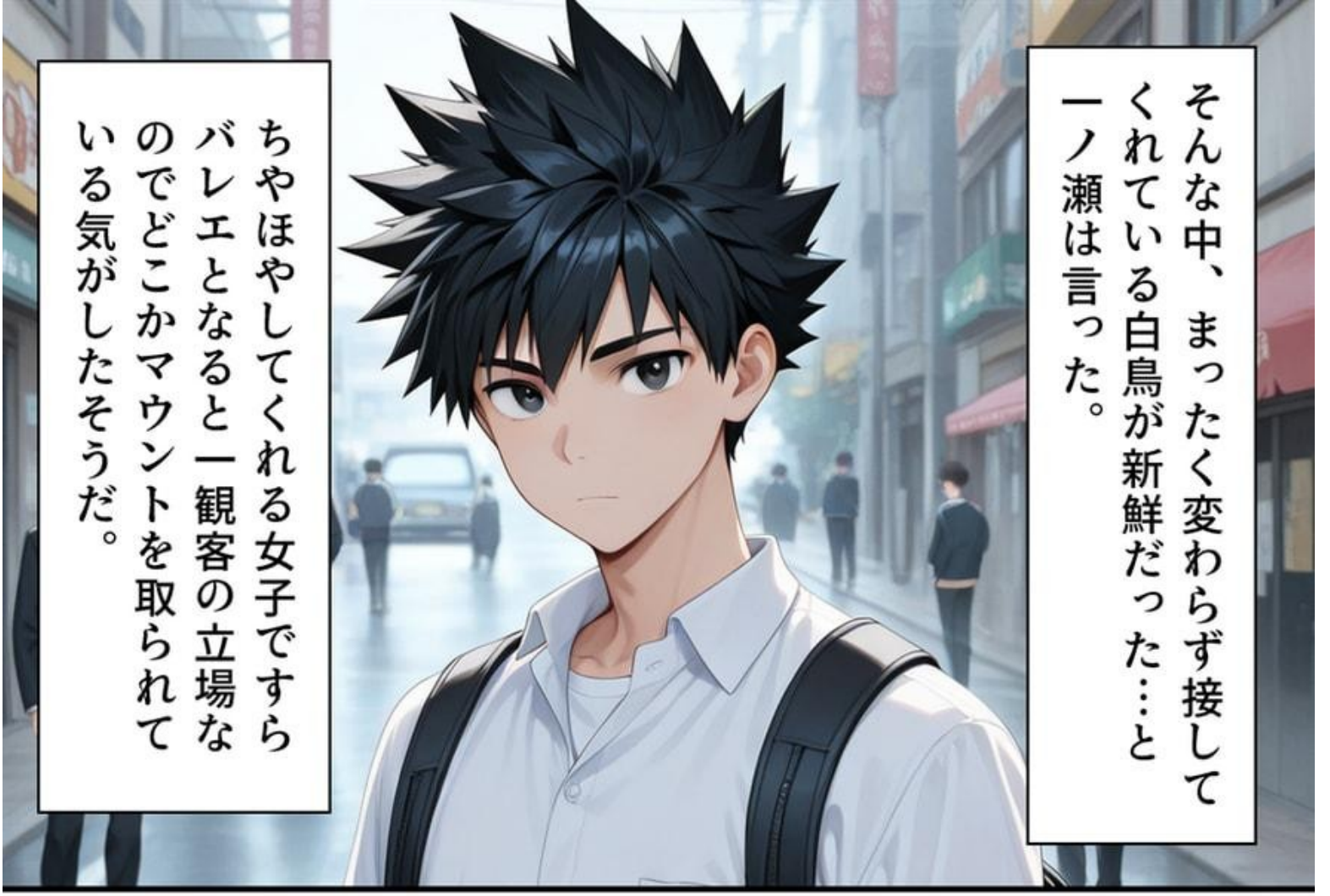
正直それはある程度仕方がないと思う。小学生の男の子なんてバカそのものだ。ヘンテコな恰好でよちよち踊る女なんてそりゃからかうだろう。

実際、日本のバレエ人口はフランスに次ぐらしい。ただ、その大半は「子供の習いもの」で、発表会などの動員であるという。小学校高学年、中学とどんどん脱落していき、高校になっても続けていたのは一ノ瀬の通っている教室では一人しかいなかったという。

自分としては他の子が野球やサッカーなどの部活をしているのと変わらない意識なのに、妙に特別扱いをされるのが昔から違和感があった。まるで腫れ物に触る様で、自分としては普通に接してほしかった…そうだ。

一ノ瀬には悪いんだけど、正直その直感は当たっている。男どもは「バレエとか（笑）」と頭から上から目線で小馬鹿にする空気があった。

これがアイドルだモデルだならまだちやほやもしただろう。しかし、あの恥ずかしいカッコでパンツを見せつけながらくるくる回るなんてアホらしい…と思っていた。
ただ、民度の高い学校ゆえか決して態度に露骨に出したりはしない。
そこが余計に気持ち悪かったというのだ。


そんな中、まったく変わらず接してくれている白鳥が新鮮だった…と一ノ瀬は言った。
ちやほやしてくれる女子ですらバレエとなると一観客の立場なのでどこかマウントを取られている気がしたそうだ。

そこへ行くとオレなんぞバレエ知識が皆無なので
知ったかぶりすらしない。「それ何？」「どういうこと？」など素朴な質問をしまくる。単にアホなだけだと思うんだが、その反応も面白かったそうだ。

その飾らない性格故か、こっ恥ずかしいがうっすら一ノ瀬のことが好きになり始めていたかもしれない。
普段はごくごく普通の女子高生なのに放課後は綺麗な踊り子になるなんて、変身ヒーローみたいで格好いいじゃないか…なんてアホなことも思い始めた。

そんなこんなでどういうわけか一ノ瀬の練習を見学させてもらうことができた。

靴や裸足、靴下では都合が悪いとかで、なんかトゥシューズの安っぽい感じのを履かされた（練習用のバレエシューズ）。何だか場違いで偉く恥ずかしい。

ある程度覚悟はしてきたつもりだったが
圧倒された。
浮世離れした格好の女の子たちが
飛んだり舞ったりとまるで「おとぎ
話」の中に迷いこんだ様な気分だ。

中でもやはり一ノ瀬のパフォーマンスは圧巻だった。
オレみたいなど素人が見ても分かるほどの存在感だ。

正直、半裸で踊る女の子たち…もちろん一ノ瀬含め…
が間近で見られるというスケベ心もあってやってきた
のだが…
真面目に真剣に汗を流す様子はまるでアスリートだ。
冷やかし気分だったオレはそっちの意味で恥ずかし
くなった。

そして休憩に入る一ノ瀬はオレのそばを通り過ぎつつ
ふっと笑った。
濃いお化粧に汗だくだったが、実に美しかった。

そんなことがあった後も、オレと一ノ瀬は程よい距離感を保っていた。
このまま順調に付き合いが続いて行ったりすればいいな…とひそかに期待し始めていた。
…だが、世の中そう都合よくばかりはいかない。

それがこいつ「真宮寺明彦（しんぐうじ・あきひこ）」だ。クラスが違った一年生の時にはそれほど興味関心も示さなかった奴だが。同じクラスになった途端
猛烈に一ノ瀬に話しかけ始めやがったにわか野郎だ。まあ、人のことは言えないのだが。

ただ、真宮寺が凡百のにわかと違っていたのは豊富な「バレエ知識」だった。
どうやらある程度は「いいとこの坊ちゃん」であるらしいヤローは観劇経験も豊富で、有名どころのバレリーナやダンサー、演目の背景に至る知識すら豊富だった。

一ノ瀬もこういう「正面から正統派」なアプローチをされたことが初めてらしくてかなり嬉しそうだった。バレエのチケットは決して安くないため、あれだけちやほやされながらも一ノ瀬の舞台を観劇した上で感想を言ってくれたクラスメートが皆無だったこともある。

だが、オレは正直こいつのことが気に入らなかった。
別に金や権力がどうこうではない。

頭脳明晰、スポーツ万能に加えて二枚目ともなればそりゃ女にはモテる。
だがこいつにはよからぬ噂があるのだ。

それは「女癖の悪さ」だった。
元々のスペックが高いからモテるのに女を落とすことに快感を得るタイプらしく、付き合い始めたとなったらさっさと捨てて次に行くというのだ。
別れを告げられて放課後、校舎裏で泣いている女子がたびたび目撃されている。

クラスでも良好な関係を築いている一ノ瀬。もしも彼女が真宮寺の野郎に傷つけられたりしたら…。
そんなことは想像もしたくない。絶対に阻止せねば。

あ、真宮寺。おはよー
また一ノ瀬に危機感が無いもんだから見ていてハラハラする。
バレエなんつー高尚な趣味で一流プレイヤーなのに気取ったところが無いのは結構だが…能天気に過ぎるだろう。

その為オレは、柄にもないことを決意した。
放課後はすぐに帰ってしまうので、昼休みに呼び出した。

どうしたん？白鳥。
改まって。
相変わらず舞台上やレッスン場ではあんなにキリっとしてるのに普段はぼんやりしている一ノ瀬だった。

あのな一ノ瀬。
よく聞いてくれ。
こんな人間社会の暗黒面みたいな話はしたくないが仕方がない。

真宮寺のことなんだけどな
ああ、真宮寺ね。あいつがどうしたの？
気を付けた方がいい
…何言ってんの？

オレだってその場にいないやつの悪口なんて言いたくねえよ。
でもこいつはヤベえんだって

オレは仕方なく真宮寺について聞いた
良くない噂について並べた。はっきり
言ってこの学校にいれば当然耳に入る
レベルの噂ばかりだったが、一ノ瀬は
どれも全く聞いたことが無かったらしい。
単に女癖が悪いのみならず、配下の男子
生徒を引き連れて番長グループめいた組
織すら結成しているらしい。

白鳥…あんたまで他のみんなと同じ様な事言うんだね。
一ノ瀬は育ちがいいのか「人の悪意」に悪い方向で敏感だ。無暗に人を悪く言ってはいけないと思っているんだろう。

いや、そうじゃないんだ！と、とにかく用心に越したことはないから！
我ながら無茶な論理だとは思ったが言わずにはいられなかった。
そして思わず叫んでいた。

い、い一ノ瀬！お前のことが好きだ！
付き合ってくれ！
思わぬ言葉が口を突いて出ていた。

…え？…
余りにも意外な言葉だったのか、一気に毒気が抜ける一ノ瀬。どうやらこれだけの存在なのに、いやそれが故か「告白」されたことが無かった模様だ。

結局その日は余りにも急だからということで明確な返事はもらえなかった。
そしてまた平穏な日々が訪れる。

真宮寺の野郎は相変わらず一ノ瀬に声を掛けに来るものの、それ以上のことはしようとしなかった。
オレが一ノ瀬に告白したのは、「付き合っている相手が既にいる」ってことでせめて奴の毒牙から遠ざけられれば…という意図もあった。

ちょっと白鳥！
あんたしっかりしてよね！
クラスメートの藤崎真由（ふじさき・まゆ）。一ノ瀬との共通の友人というところだ。一ノ瀬とオレの間に何かあったことを察知して釘を刺しに来た模様だ。

そして、あのイベントが
やってくる。

オレたちの学校は二年の夏休み明けに「修学旅行」を行った。場所は「京都」。
まだ真夏とほぼ変わらない気候ということもあり、制服はネクタイなども簡略化された夏仕様だ。

普段はこうした行事にはほぼ参加しない一ノ瀬が参加したことも軽く話題になった。彼女の周囲には自然と人が集まる。天性のスターなんだなあと思う。

こいつは佐藤蓮（さとう・れん）。修学旅行の同じ行動班に組み込まれた。歴史オタクらしくどれも同じように古ぼけた建物にしか見えない
神社仏閣についてあれこれ解説してくれる。中高生のガキには京都旅行はその価値が分からんなんて言われてるが、こいつは満喫しているようだ。

ほぼ移動と宿の割り当てに忙殺された初日と違い、二日目は自由行動だった。一応の班分けはあるが、
仲良しグループと共に勝手に行動しているようだった。

確かに「子供」に分類はされるだろうがとはいえ「高校生」である。
特に問題なく「自由行動」は行われた。

普段から仲良しの女子グループなどは自由行動時間が開始されると同時に飛び出していった。

中には「自由行動」をいいことに、ちゃっかり京都デートとしゃれこんだカップルもいた。
とはいえこの二人の仲は修学旅行のはるか前には周囲にバレバレで、生暖かい目で見守られながら京都の町に消えていったという。

一ノ瀬とはあの件以来、微妙な空気が流れてしまっていた。
だが、実はこの日、自由行動の後半に落ち合うことになっていた。自由行動の前半は女子グループと仲良く遊んでいるらしいので安全だろう問題の後半にボディガード兼ねて一緒にいようというわけだ。

おう！どうした白鳥！
もう彼女に会いに行きたく
なったか！？
こいつはどういうわけか同じ行動班に
配された剛田竜牙（ごうだ・りゅうが）
である。

剛田は柔道部の主将を務める大男だ。
金で取り巻きを釣って裏番を気取ってる
真宮寺と違い、実力で学校をシメている
ともっぱらの評判だった。実際この見た
目のこいつにケンカを売る命知らずはそ
うはおるまい。
特に同じクラスになった女子に他校の不良がからんだり
すれば大変なことになると言われている。真宮寺が一ノ瀬
に一線を越えないのも剛田の存在があるからと言われてい
た。本人は硬派で男臭く、高校の内は柔道に専念したい
から女とは付き合わないと公言している。それが更に別の
方向で女子にモテる存在だった。

その頃、同市内では奇妙な邂逅が行われていたのだが、それは後の話である。

一ノ瀬結花は道に迷っていた。
いや、実際には迷っていたというよりは、白鳥との待ち合わせのため行動班を一旦解散して一人っきりで京都散策をしていたら、
ほぼ人気の無いさびれた住宅街みたいなところに迷いこんでしまったのだ。

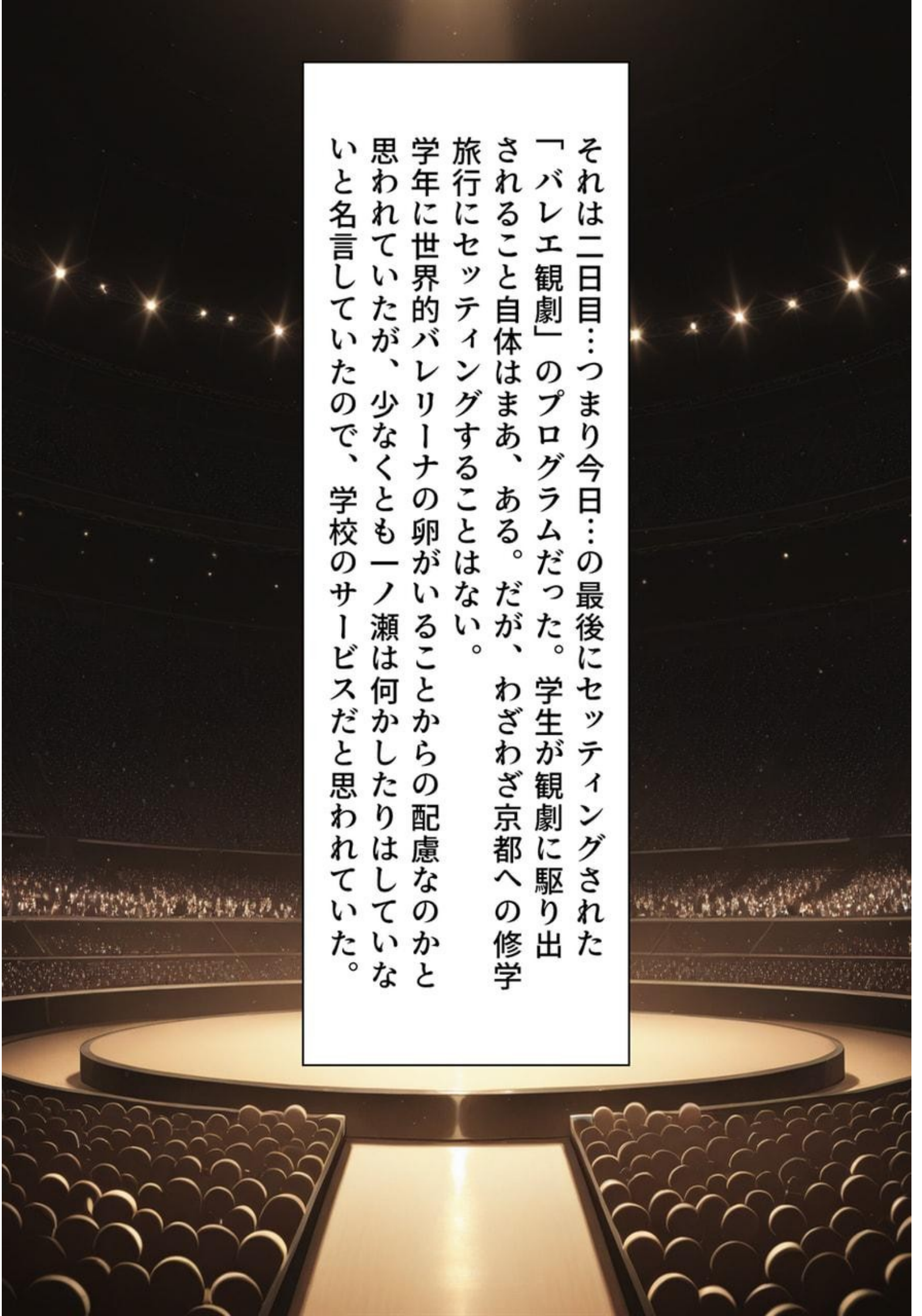
ちょっと一人になるのは早すぎたかな…
とも思ったが、初めて来る京都をぶらつく
のも悪くない…と思い始めていた。
白鳥との合流の約束まであと一時間以上ある。
まあ何とかなるだろう…そう思っていた。

ふと視線を上げると、そこには真宮寺が佇んでいた。

あれ？どうしたの真宮寺
こんな寂しいところに。
道に迷った？
一ノ瀬は能天気に言った。

一ノ瀬こそなんでこんな
ところに？
まーいーじゃん。

真宮寺と一ノ瀬はその場で立ち話をした。
相変わらずのバレエ知識で盛り上がる二人。
そして真宮寺が一ノ瀬に「プレゼントがある」と言い出した。
もしかしてあれのこと?と一ノ瀬は言った。



それは二日目…つまり今日…の最後にセッティングされた「バレエ観劇」のプログラムだった。学生が観劇に駆り出されること自体はまあ、ある。だが、わざわざ京都への修学旅行にセッティングすることはない。

学年に世界的バレリーナの卵がいることからの配慮なのかと思われていたが、少なくとも一ノ瀬は何かしたりはしていないと名言していたので、学校のサービスだと思われていた。

え？あれって
真宮寺の仕込み
なの？
あたしのゴリ推しじゃないか
って結構からかわれた
んだけど（笑）

正真正銘君のために
僕がねじ込んだんだよ
受け取ってくれるかい？

別に舞台観るくらいするけどさ…。
あたし踊らないよ？なんの準備もしてきてないし。
当然だよ！ゲストが舞台にあがる必要なんてないさ。
まさか本気であたしのためにあんたがそこまでやったの？

ああ、その通りだ。
単刀直入に言おう。一ノ瀬。
僕と付き合ってくれ。
真宮寺は静かに言い放った。

……
一ノ瀬は即答できなかった。何とも言えない「違和感」を感じたためだ。一見すると相手の女に気を遣っている様でいて自己中心的な思考なのだ。

!!っ!?

一ノ瀬は気が付いた。
袋小路の出口に別の男子が
立ちふさがっていた。

遂に危機感を感じた一ノ瀬は一目散に反対方向に走った。
しかし、そちらの方向も塞がれていた。あろうことか恐らくは真宮寺の手下の手には木刀らしきものまで握られている。

ふと真宮寺の方に視線を向けると、
信じられないほど邪悪な顔をしていた。

ちょっと真宮寺！
どういうつもりなの！？

見ての通りだが？
まあ、余り抵抗はしない
ことだ。
世界的バレリーナの卵の
顔や身体が擦り傷だらけ
になってもつまらんだろ

世界的バレリーナの卵、一ノ瀬結花は今の自分の置かれている絶望的な状況に戦慄し、背筋に冷たいものが走り抜けた。

どうしてこんなことになってしまったのか。

白鳥の「とにかく真宮寺はヤベえ」という頭の悪い忠告にもっと耳を傾けておくべきだった。

単独行動を避けたり、人気の無いところには行かなかったりすれば…とも思うが後の祭りだ。

…あたしを一体どうする気なの？
現実感すら喪失した一ノ瀬はかすれる様な声で言った。

どうなる？ってそりゃ
お前、いい年こいて
そんなことも分からん
わけじゃあるまい。

ガキじゃあるまいし。
…おっと…抵抗するなよ。
下手にケガなんぞすりゃあ
次の「舞台」に差し支えるぞ

いつの間にか一ノ瀬は、獣欲を
ギラつかせた「取り巻き」たちに
周囲を囲まれていた。

真宮寺さん。オレらにも
味見させてくださいよ。

そのうちな。
今日はオレだ。
周囲を見張ってろ。

「今日」…は？

はーっはっはっは！
こんな楽しいこと一回
きりで終わらせるわけが
ねえだろうが！
しっかりおめえの恥ずかしい
写真撮影しておいてやるから
逃げられねえぞ！
これからおめえは俺たちの
おもちゃになるんだよぁ！

…そんなことしてタダで済むと思ってんの!?犯罪の証拠を自分で残して…バカじゃないの？表に出れば捕まるのはあんたたちだよ！
っ!!?
確かにそうだ。だが、裸画像をバラまかれてダメージが大きいのはどっちかな？
大人しく観念しな踊り子さんよお。

白鳥…一ノ瀬のところに行かなくて大丈夫か？
合流予定は一時間後だし…あっちも友達と楽しんでるだろうからまだいいよ。

そーいや思い出したよ。
一年の時に、バレー部の
次代エースって言われてた
子が自殺未遂の上未だに
引きこもりで学校来て無い
けど…あれ本当にあんた
だったってこと？

知らんね。自殺未遂も
不登校も本人が勝手に
やってることでオレには
関係ない。
まあ、あいつの「過激な」
写真は持ってるがね。

最低！どうして
そんなことすんの！？
そりゃより将来有望な女を
潰す方が楽しいからな。
それこそお前みたいな。
…信じられない…

大体オレは上流階級の人間だぞ？
将来は同じ上流階級同士で結婚するに決まってる。
ちょっと運動が出来る程度のド庶民がこのオレと一瞬でも「付き合ってる」気分になれたんだから泣いて感謝すべきだろうが。

やめ…て…

ん？ああ、やめて欲しいか。
ならやめてやってもいいぜ。

その代わりクラスの別の女子をやっちまうぜ。藤崎なんか丁度手頃な感じだな
…何言ってんの？本当に頭がおかしいんじゃない？
別に藤崎じゃなくても誰でもいいぜ。あ、教師にチクろうとしても無駄だぞ。ウチの実家は太いんでな。これまでと同じく握りつぶすだけだ。

白鳥…ごめん…
一ノ瀬は覚悟を決め、あふれる涙
と共に、歯を食いしばり、目を閉じた。

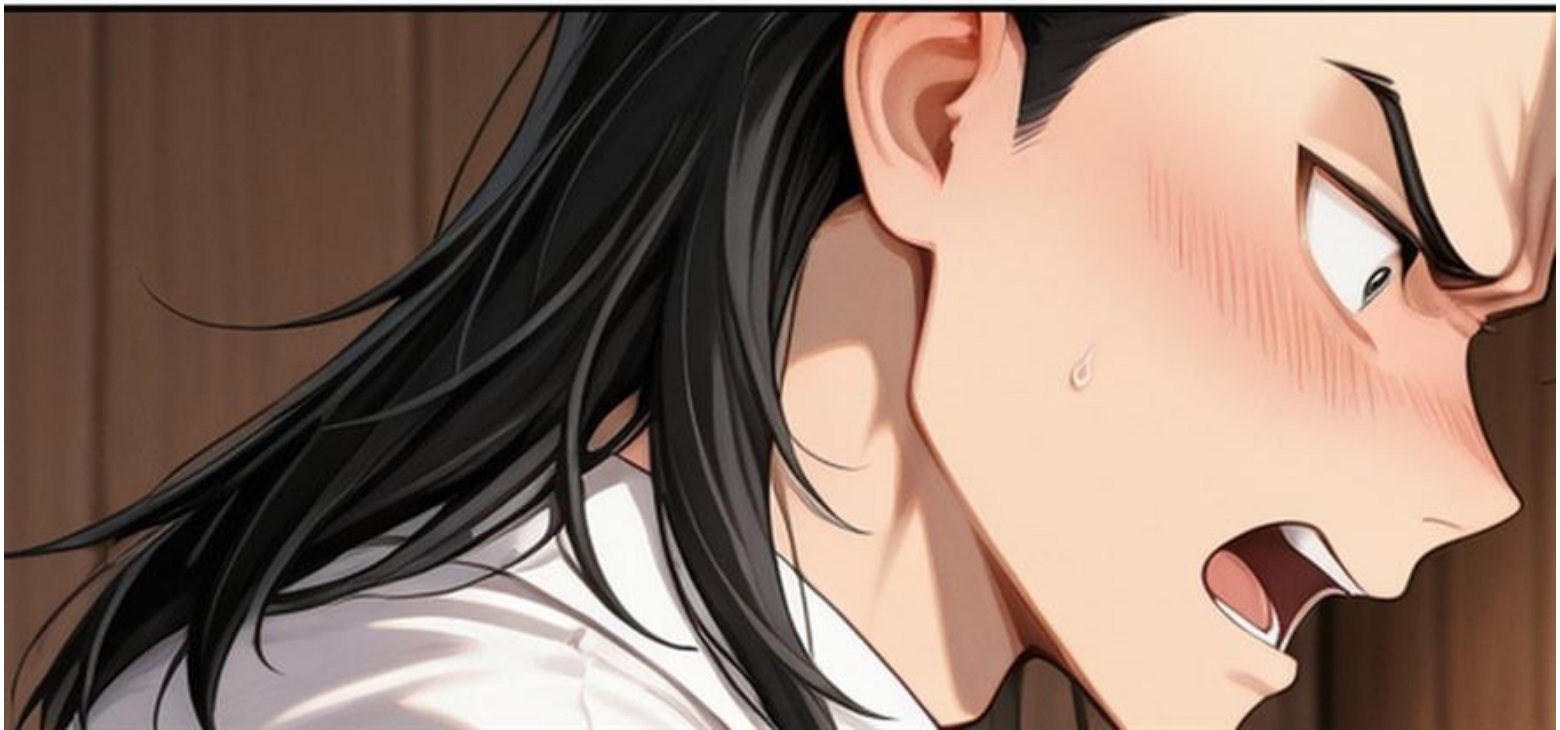
覚悟を決めた…のに一ノ瀬の身体には
何も触れるものすらなかった。
不思議に思って片目を
開けてみた。

見上げた真宮寺は、まだ何もしていないのに厳しい表情で脂汗を流していた。
何か体調に異常を感じている様だった。

な…なん…だぁ…？
突如、真宮寺の胸がまるで
乳房の様に膨らんできた。

それは信じられない光景だった。
言うまでもなく、見る見るうちに
乳房が膨らむなどということが
現実に起こるはずがないからだ。

う、うわあああああーーー！
大きな乳房で股間を押さえつける真宮寺。
何が起こっているのかは明らかだった。



ば…ばかな…
一瞬にして真宮寺の身体は女のそれに
性転換してしまった。

一瞬で男が女になるという
超常現象を見せつけられた
一ノ瀬は余りのことにどう
反応していいか分からな
かった。
だが、これはほんの序盤に
過ぎなかったのである。

おわあああああーーっ！

真宮寺は変わり果てた自らの身体を
見下ろして何やらぶつぶつ言い続け
ている。
一ノ瀬結花はその姿を
「練習着みたい」と思った。

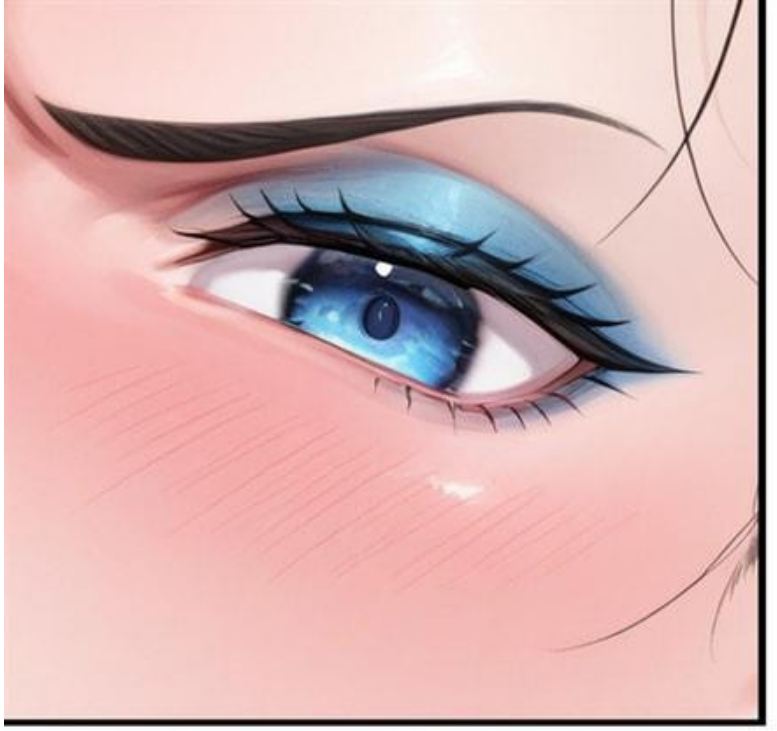
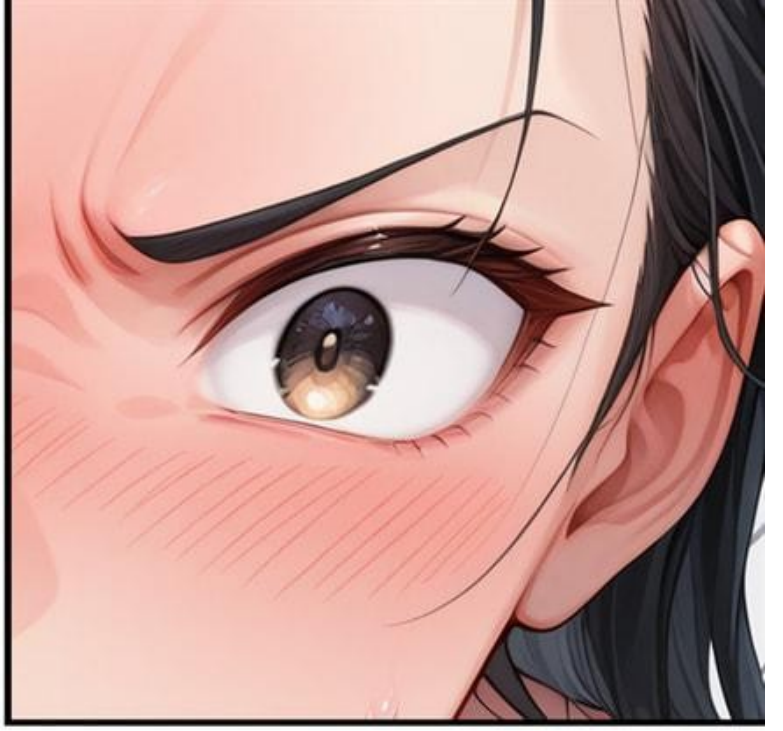
事態は明らかだった。
学校一の伊達男だった真宮寺は今や女となり、着ている服はバレリーナのチュチュへと変わり果てたのだった。

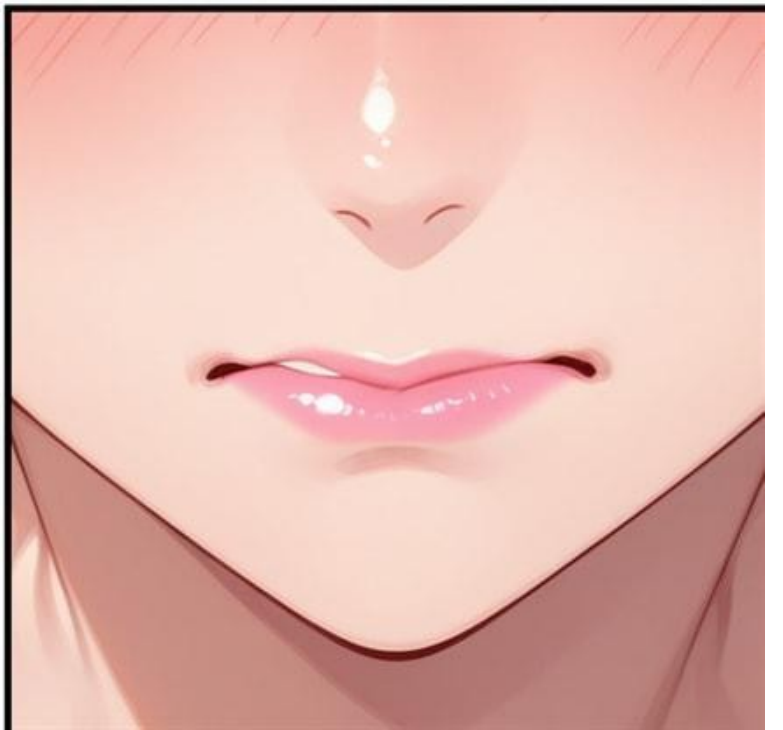
仰向けに押し倒されていた一ノ瀬は
起き上がっていた。
まだ周囲に取り巻きがいる以上、事態が逆転したわけではないが、「首謀者」の状況を見るに、「最大の危機」は脱したと言ってよさそうだ。

い…一ノ瀬…助けて…くれぇ…
オレを…元に戻して…くれぇ…

は？冗談は顔だけにしてくれる？
大体、あたしは確かにバレリーナだけど他人を「バレリーナにする力」なんて持ってないんでね。

一応関係者としちゃああんまり軽はずみに着てもらいたくは無いけどさ。
女の人権をないがしろにするあんたにゃお似合いだよ



学年一の色男は見る影もなかった。
細く華奢な身体を白銀の衣装に包み、重力に逆らうスカートを上下させ、
濃い舞台メイクで佇んでいた。

お、お前ら！
構わねえからこいつ
やっちまえ！
真宮寺は見た目に似つかわしくない
叫び声を可愛い声であげた。

そこにあったのは「悪夢」
だった。手下連中もまた、
全員がバレリーナとなって
いたのである。

どんなからくりなのかは全く分からないが、真宮寺を含めたチンピラたちが全員バレリーナになって呆然としているスキをついて一ノ瀬は猛然と走り出し、その場を離れた。

一ノ瀬には確信があった。連中は女になって、バレリーナの衣装であるチュチュを着せられると同時に「トゥシューズ」も一緒に履かされている。トゥシューズは激しく踊ってジャンプしまくるバレリーナが履いているのでさぞ運動しやすいと思われるかもしれないが、トゥシューズでは「歩く」ことはほぼ出来ない。同様に「走る」ことも実際問題不可能だ。

あれはバレリーナ特有の立ち方である「つま先立ち」をするためだけに特化した靴だ。というより木製の詰め物をつま先に固定しているだけのものである。なのでかかと部分を接地することをそもそも想定していない。あれほど厳重に足首にリボンを巻き付けてあるのはひたすらつま先カバーが外れないようにしているに過ぎない。普通にすり足の様に移動することは不可能ではないが、よほど訓練されていないと不可能だ。

かといってちょっとやそっとではすっぽ抜けない構造になっている。つまり素早く脱いで追いかけてくることは難しい。
どうにか脱げてもほぼ裸足と変わらないので、砂利道やアスファルトを走って追いかけることは無理だろう。

少し時間がさかのぼる。
某市民ホール。

人気の無い寂しい事務所の中で、
長月透子（ながつき・とうこ）は
苦悩していた。

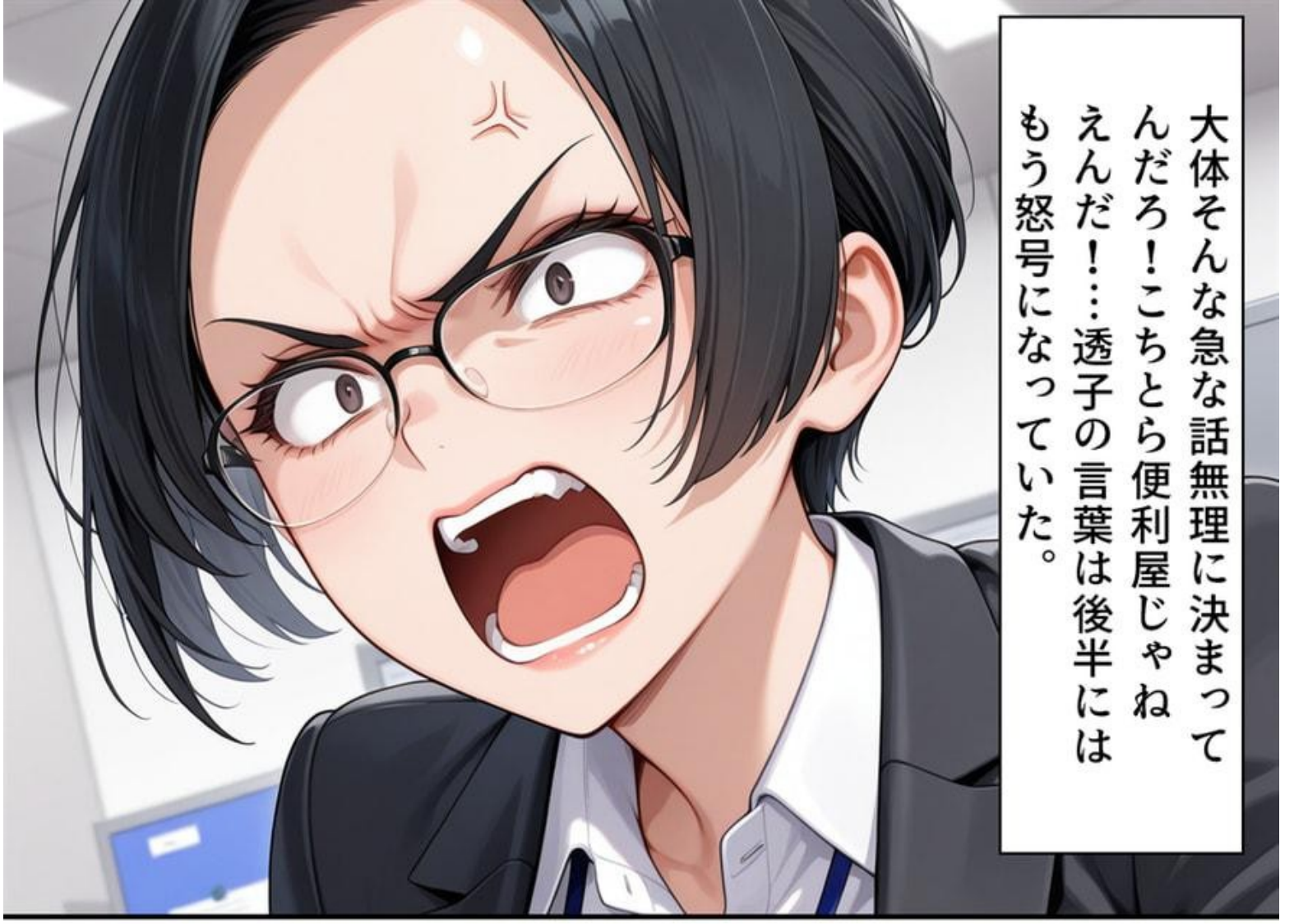
今日、修学旅行の団体がやってくる。
それ自体はよくある話だ。しかし、突如演目をバレエにしろという圧力がかかったのだ。

急にそんなことを言われても演者さんたちの都合だってある。

懸命のブッキングを続けて来たが、どこも急なオファーに断られた。そりゃそうだろう。

そして先ほど、一縷の望みを掛けていたバレエ団体から断りの電話が来たところだった。つまり、本日バレエの演目を用意することが不可能になったのだ。。

突然呼ばれたので見てみると、どこから迷いこんだのか小さな女の子がいた。「お悩みは？」なんてませたことを言うので、他の職員が一切いないことをいいことに、あらいざらいぶちまけた。


大体そんな急な話無理に決まってんだろ！こちとら便利屋じゃねえんだ！…透子の言葉は後半にはもう怒号になっていた。

ふむふむ…つまり、バレリーナさんがある程度の人数確保できればいいわけね。
まかせて！迷惑にならない範囲内でちゃんと揃えるから！と確かにその少女は言ったと透子は後に証言した。

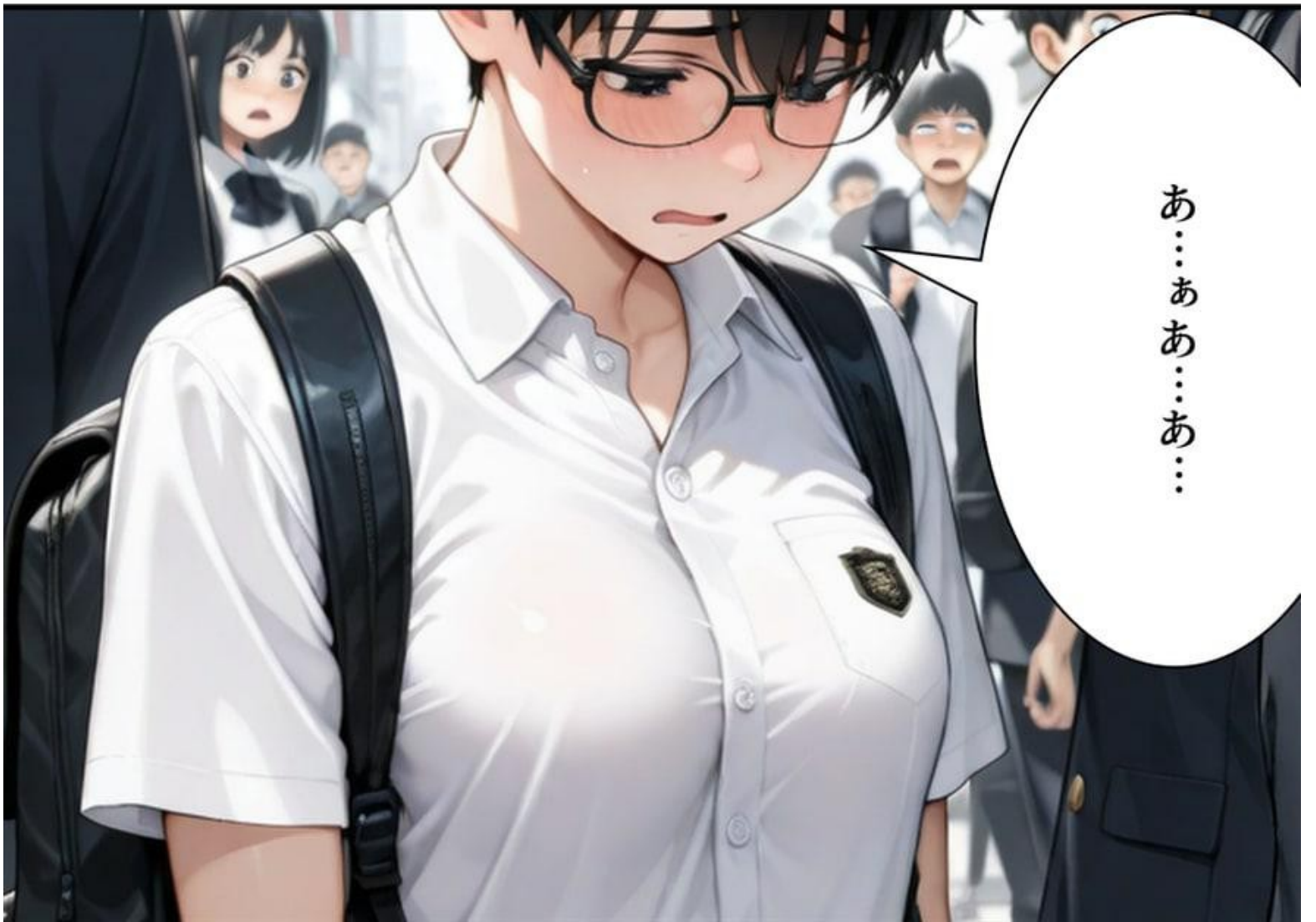
それにしてもいいよな白鳥は。
あんな可愛くて綺麗な彼女がいてさー。
佐藤が思わず言ってきた。もう少し歩いたところにある駅でひとまず解散の時だ。

いや…別に…そういうわけでもねーけど…
特に誰にも話した覚えはない。一ノ瀬から漏れるとも思えないし…全く不思議な話だ。
そう思った時だった。

静かになったのでふと隣を見ると、あれほど
にぎやかにしゃべり続けていた佐藤が脂汗を
だらだら流して固まっていた。
…どうした佐藤？

…？…
どうした佐藤？
な…何か…身体が…
お…おかしい…

うわあああっ！
さ、佐藤お前…

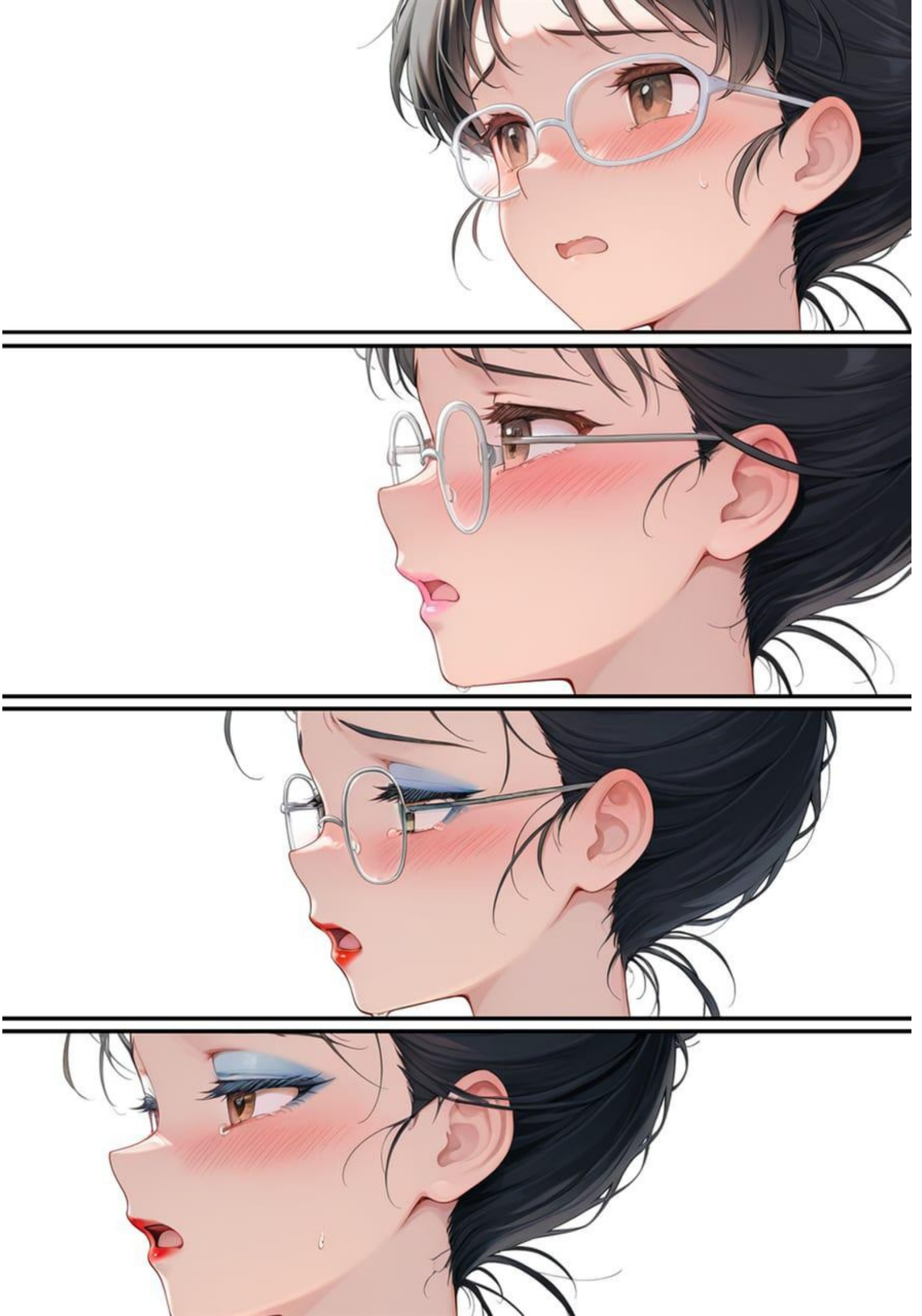

あ…ぁあ…あ…

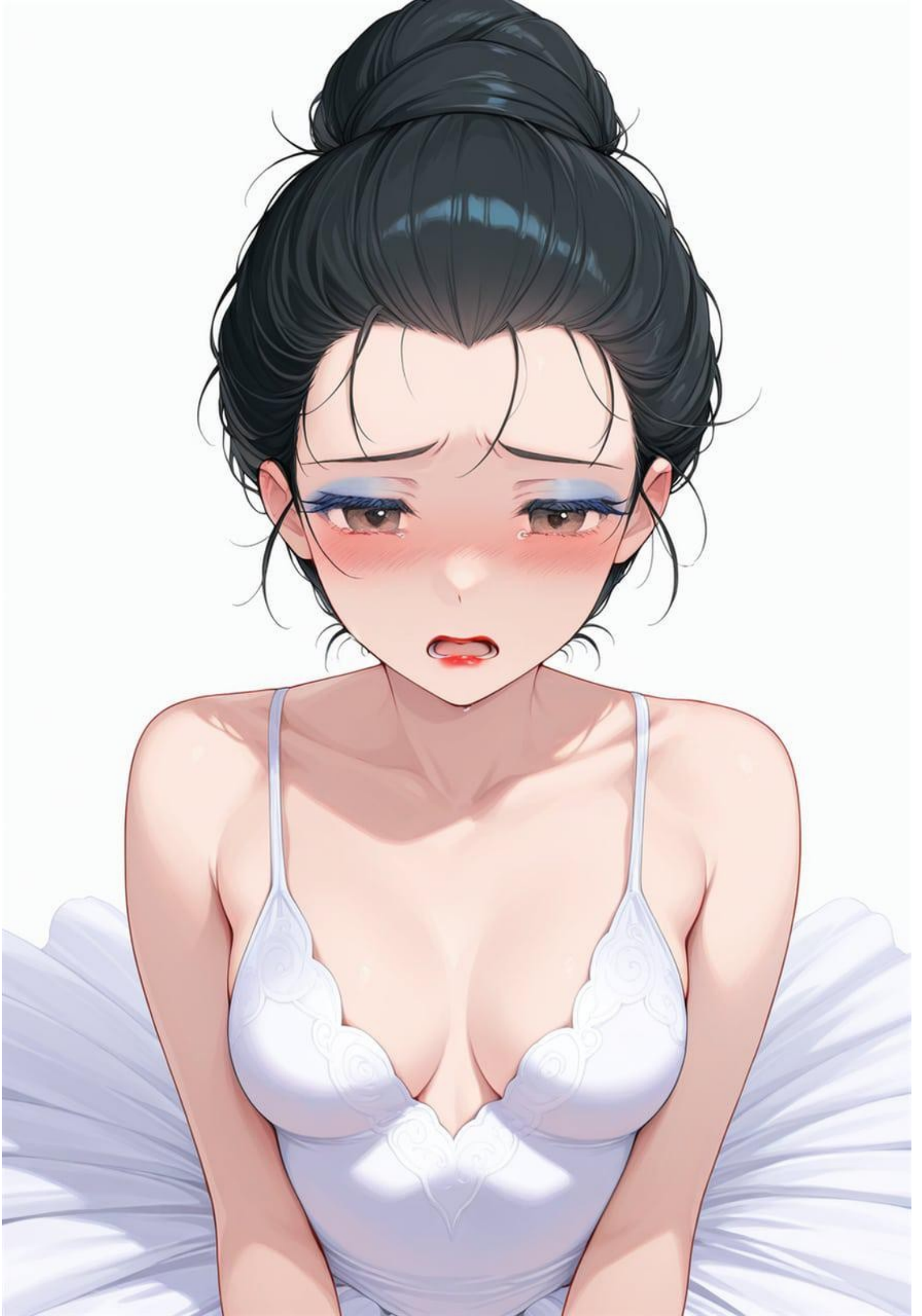
佐藤の胸はまるで巨乳グラビアアイドル
みたいに膨れ上がっていた。

あぁ…ああ…あ…
佐藤は乳房に邪魔されながら
下腹部を触っていた。それが
何を意味するのかは言わずも
がなだった。

何ということだろう。
あれよあれよという間に、佐藤の身体は女へと
性転換してしまっていた。

佐藤は、見たこともない奇矯な姿になっていた。





陽気な歴史オタクメガネ少年は今やなく、全身バレリーナになってしまった。

観光客や修学旅行の学生が行きかう街中に
佇むバレリーナは正に「異様」だった。

少し近寄ってみるとまるで
一ノ瀬みたいな美しさだった。

佐藤…お前…
どうしちまったんだよ…
分かんない…

同時に周囲の男子高校生たち
が次々に女体化し始めた。

突然の事態に困惑すること
しかできない少年たち。

うわあああ！！
お、お前らみんな！？
な、何なんだよそれはぁあ！

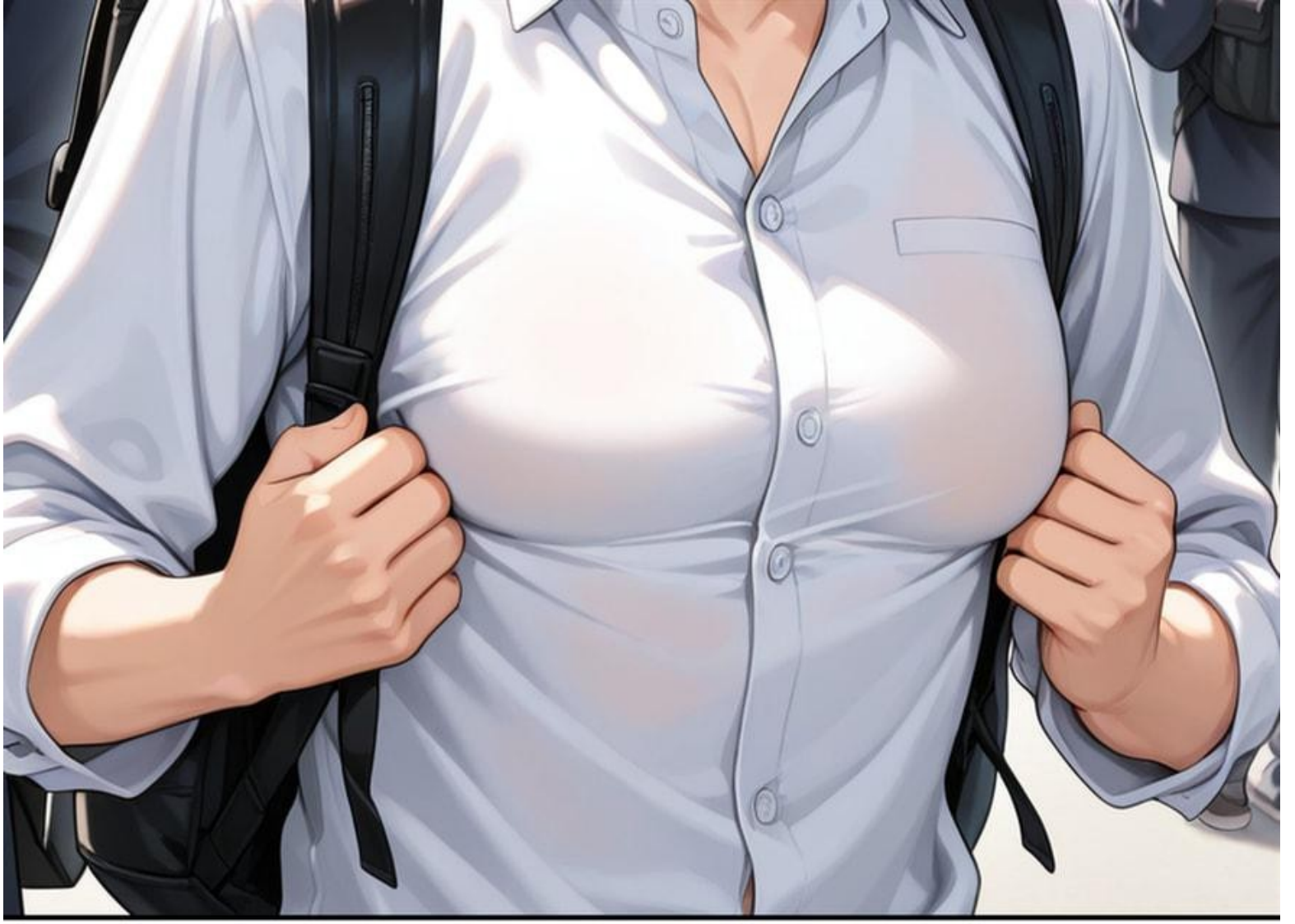
その場にいた少年の内
かなりの人数が
お互いにバレリーナとなり果
てて向かい合っていた。

不思議なことにこの現象に巻き込まれて「バレリーナ化」したのは「男子」ばかりで、生まれつきの女子は変身することは無かった。

当然だが、突如バレリーナ化した
少年たちはバレエ経験すらなかった。

余りにも常軌を逸した出来事に、周囲も咄嗟に反応できなかった。

同時にオレは胸部に違和感
を感じ始めていた。
ま…まさか…そんな…



信じられない現実だった。

し…白鳥…お前…も…
先んじて「白鳥」となっている佐藤が心配そうにしてくれる。

うわ…あああ…
何ということだろう。俺の下腹部の膨らみはどんどん体内に収納されていき、平らになっていった。

あ…あああぁ…
俺の身体もまた、完全に女になってしまっていた。

いつの間にか足首から先が奇妙な感触になっていた。
靴部分が、本来は「バレリーナ」が履くべき「トゥシューズ」へと変貌していたのだ。

オレの身体は周囲の男たちがそうであるように、女にされた上、バレリーナ姿へと変貌しつつあった。

そんな…もう止まらないっていうのか…。

うわあああああ！！
うわあああああーーーっ！！

その時、唐突に一ノ瀬のバレリーナ
姿が思い浮かんだ。そんな…オレは今
あの時の一ノ瀬と同じ…バレリーナに
なってしまっているってことなのか！？

そんな…なんで男のオレが…ば、バレリーナに…

そんな…か、髪の毛…まで…
伸びて…

な、何なんだよこれはぁあああ！

ど、どうしちまったんだ
オレはぁあ！！
改めて言葉にするのも恥ずかしいが、オレは女の身体に性転換させられたうえ、「バレリーナ」の恰好にされていた。

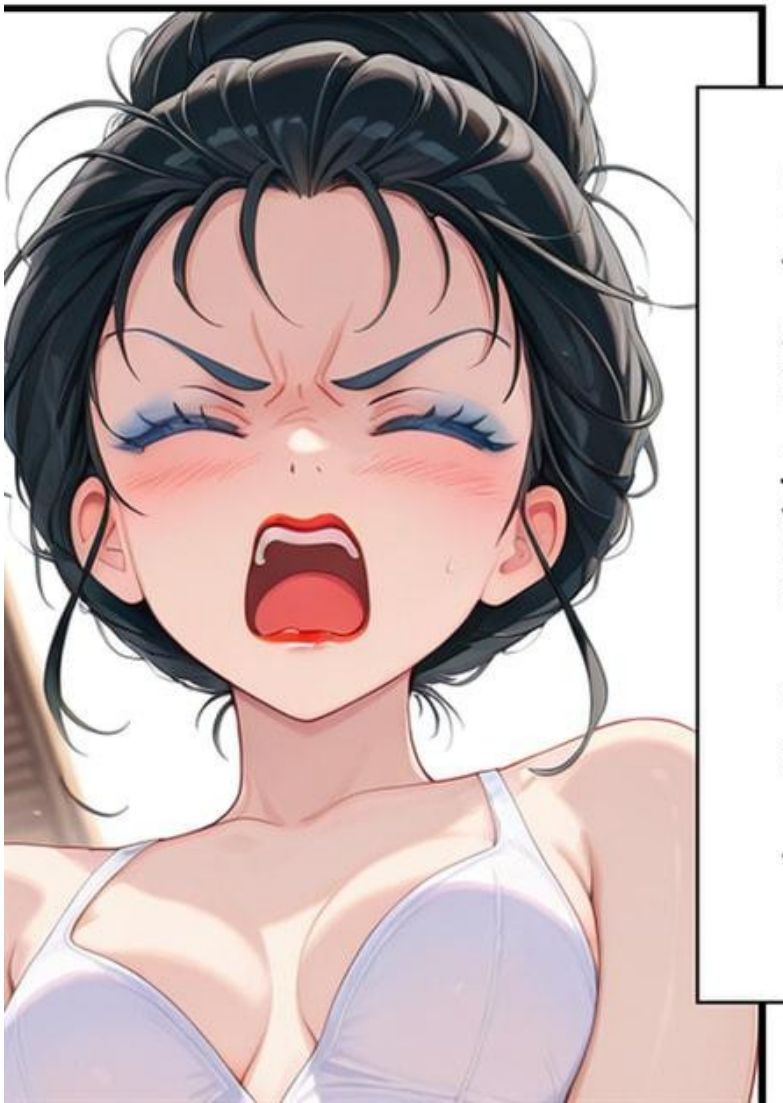
なんということだろう。
オレは字義通りの意味で、
頭のてっぺんからつま先
まで、全身バレリーナに
なってしまったのだ。

ば…バカな…そんなバカな…
この突き出したおっぱいも…オレのだって言うのか…！？

そんな…メイクや…髪型まで…ば、
バレリーナにぃいいいい！！
ど、どうしてオレが！オレたちがこんな目
に遭わなきゃならないんだぁ…。

スカートに遮られて全く見えないが、下腹部も寂しい。

そ…そんなデリケートなところまで…女に…。



どうすんだよ女になっちまって！

あ…足も…トゥシューズじゃないかぁ…
な、何でこんなものまで履かされなきゃいけないんだ…。
こ、これじゃ本当にバレリーナになっちまったみたい
じゃねえかぁ…。

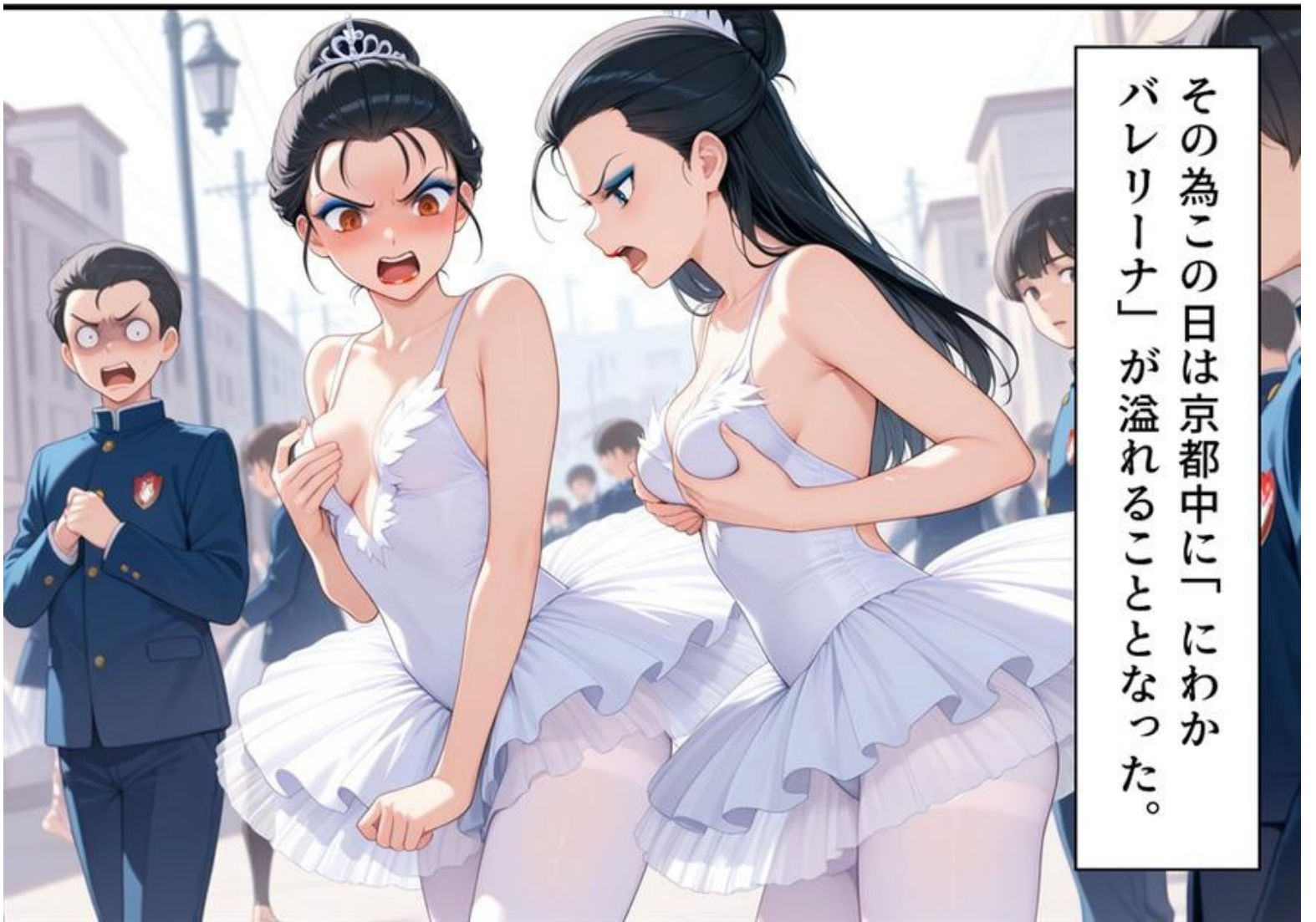
うわあああーーっ！

さ…佐藤…
しら…とり…

そしてそれは周囲も同じだった。突如繁華街に「バレリーナ」があふれた。

バレリーナたちは、肉体や
外見は少女となったのだが、
「精神」は「男子高校生」のままなので、当然ながら
大混乱となった。

白鳥らの高校の男子
生徒たちはあちこち
でバラバラにバレリーナ
と化していった。


その為この日は京都中に「にわか
バレリーナ」が溢れることとなった。

当然ながら、突如バレリーナになってしまった
元・少年たちは動揺して何もできなかった。

当然ながら修学旅行の参加者の半分は女子である。
バレリーナ化した男子生徒はとある一クラスのそれも一部の人数だ。
この「狂態」を目の前にした生粋の「女子」は華やかな艶姿と化していく「クラスメートの男子」を目の前にどう思っていたのか。

やはり女子にとっても
あの恰好はユーモラス
であると同時に過剰に

「セクシー」でもあることが
複雑な感情を喚起したらしい。

「変身」が完了した直後くらいのこと。
「バレリーナ」たちの一部が苦しみ始めた。

か、身体が勝手に！
動くぅうううう！

「バレリーナ化」には巻き込まれなかった男子もかなりの数がおり、彼らはクラスメートが女子になり、
バレリーナ姿になるところを「目撃」している。彼ら自身は性転換も女装もしていないが、深刻な「性癖こじらせ」を発症した者も多くいるとかいないとか。

結論から言うと
バレリーナたちは
身体の自由を奪われ、自らの意志と
関係なく「移動」を始めた。

単独行動をしていて、周囲でたった
一人だけバレリーナ化した男子もいた。
半端じゃなく恥ずかしかったとのことだ。

流麗なステップを舞わされながら
「移動」させられていく少年
…いや、「少女」たち。

それはオレ自身も例外ではなかった。見せたくもないすっかり処理されたワキと、そして横乳を見せつけながらつま先立ちで「っっっっ」と移動してしまう。言うまでもなく身体が勝手に動いてのことだ。

観光客で賑わう繁華街に突如出現
した「バレリーナ集団」。
それは正に「異様」な光景だった。

周囲の外国人観光客には大いに
受けた。何だかよくわからないが
凄いものが見られて興奮している。
まあ、それはそうだろう。

男の子たちが急にセクシーでユー
モラスなバレリーナになってしまう
なんて滅多にあることじゃない
（そりゃな）。

『踊り子』たちは皆、同じ方向に進んでいた。

「少年たち」は一見すると華麗に舞っている様に見えるが内心は余りの恥ずかしさに顔から火が出そうだったそうだ。
心の中では「こんなカッコ嫌だよお！誰か助けてぇ！」と絶叫していた。

もちろん、それはオレ自身だって例外じゃない。
すました顔してうなじや背中を見せつけているが、
恥ずかしくて爆発しそうだった。

街中でこのバレリーナ集団を見かけた目撃者からは、「悩まし気な表情で踊るバレリーナがよかった」などと

絶賛されたが、本当に恥ずかしくて泣きそうな表情をしているだけだったのだ。何しろ中身は男の子なのだから。

同行していた女子たちは
余りの異常事態にバレリー
ナたちを追いかけた。
「先生」に助けを求めたところでどうなるものでも
無いのだが、とにかく見失わない思いでどの女子も
必死だったという。

ほぼ同時刻、真宮寺たちの毒牙から逃れた一ノ瀬はとにかく人気のあるエリアに移動しようと必死に走っていた。

あ！結花！こんなところに！

大丈夫だった！？

大変なんだよ！とにかく大変なの！

藤崎真由は足らない語彙でまくしたてながら一ノ瀬を先導した。

男子たちが次々に
「バレリーナ」に変身
しちゃってるのよ！
えええっ！？

それ！真宮寺たちも
同じだよ！
はぁあ！？
真宮寺たちもバレリーナ
になっちゃったの！？

バレリーナにされた少年たちと同じく、単に目撃していただけと思われていた女子生徒たちもまた、操られていたのである。
バレリーナ化を免れた男子生徒ともども、同校の関係者は一斉に同じ目標に向かって歩き、走らされていた。

それは二日目の最後に集合する予定の
市民ホールであった。

多くの生徒たちは、自分たちが操られている自覚も無しに客席に座り始めた。

中には「バレリーナ騒動」を全く知らない生徒も多くいた。

当然、「バレリーナ騒動」にも話が及ぶのだが、実際に見た人間すら信じられないのにそんな話を聞かされても信じられる訳が無い。

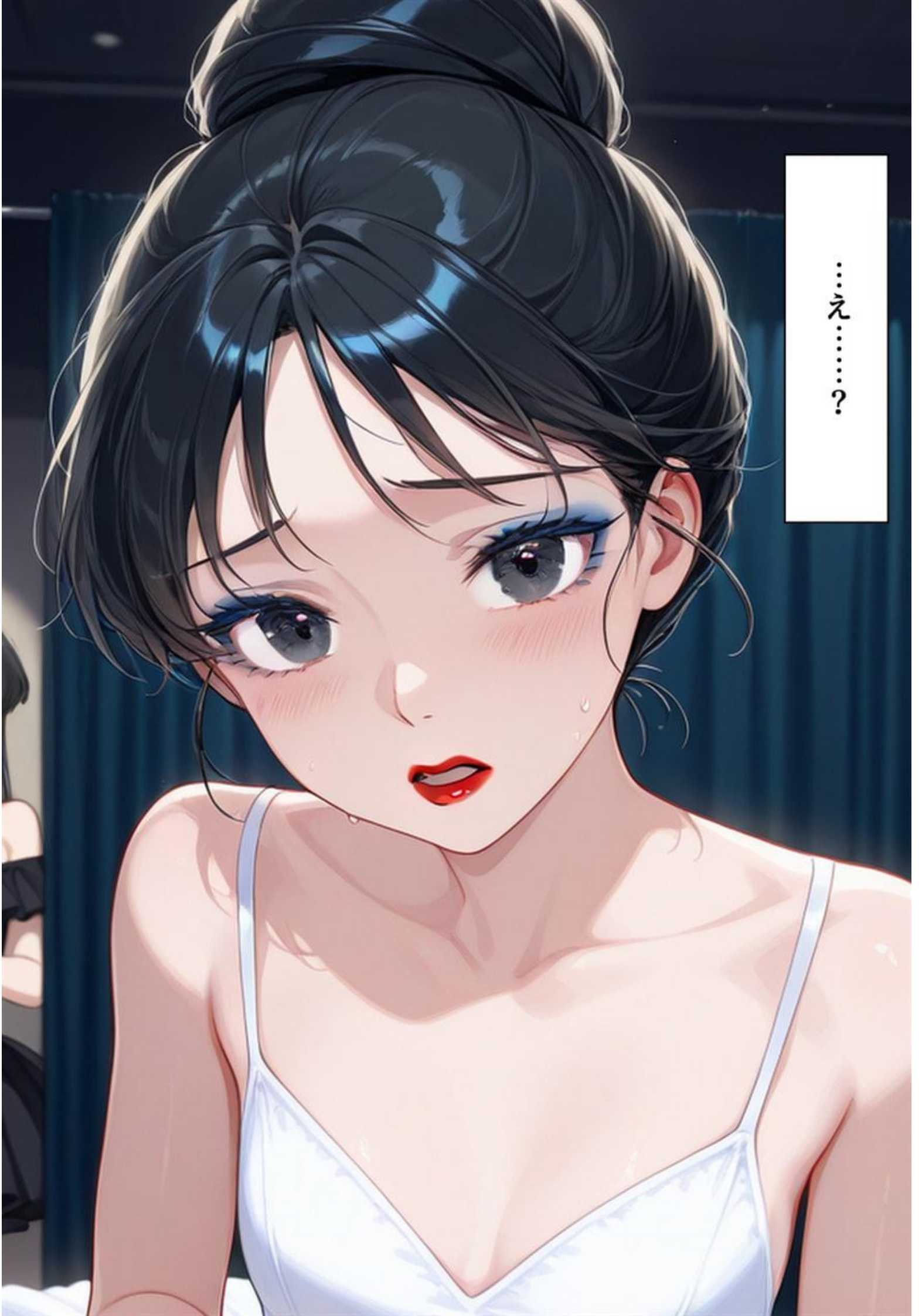
当然それは一ノ瀬も同じ思いだった。
確かに目の前で真宮寺が女になり、バレリーナになるところを目撃はした。だが、今でも幻だったとしか思えない。

バレリーナにされた元・男の子たちは
ホール内にあった楽屋というか、控室に
集合させられていた。

「少年」たちは、「女だらけの楽屋」で
待機させられる屈辱に耐えていた。
濃い化粧の甘い香りでむせ返りそうだった。

当然ながら、普段だったら爆笑している
「同級生」に対するひやかしなどは無
かった何しろ自分自身もその姿だった
のだから。

その部屋にはさすがにパフォーマーの楽屋というか控室だけあって、大きな全身鏡があった。オレはこの騒動になって初めて「鏡」を見た。


……え……？

そんな…これが…今の…オレ…！？
か、完全に「バレリーナ」になっちまってる…。

そりゃずっと主観視点じゃあこんな感じだから自分がバレリーナになってるのは分かる。しかし、改めて見るとやはりショックだ。

しかし…それにしても一体何なんだ。
オレはこんなカッコした女になって
お化粧して女まみれの控室にいる
ために生きてきたんじゃねえぞ…と
思った。

し、白鳥ぃ…
友人たちもまた
恐ろしい変貌を
遂げていた。

それにしても正に壮観だった。
あっちを向いてもこっちを向いても
変な恰好した女だらけなのだ。

言うまでもなく全員が
元・男同士である。
だが、意外なほど現在のお互いの変わり果てた
容姿への言及はなかった。

泣いたりわめいたりすれば元に戻れる訳でもないだろうというある種の諦観だったのかもしれない。

そんな時、目の前に仁王立ちして見下ろしてくる「バレリーナ」がいた。

…？！？
「あること」に気が付いたオレは
思わず立ち上がっていた。

も、もしかしてお前！
し、真宮寺なのかぁ！？
あの男前も、すっかり「バレリーナ」となり果てていた。

色々言いたいこともあったのかもしれないが、
印象的なお尻を見せつけながら奴は去った。
「変身後」この楽屋にたどり着くまでに何が
あったのかをオレが知るのは数年後になるが
それはまた別の話。

華やかな姿になっていた少年たちだが、その胸中には「不安」しかなかった。

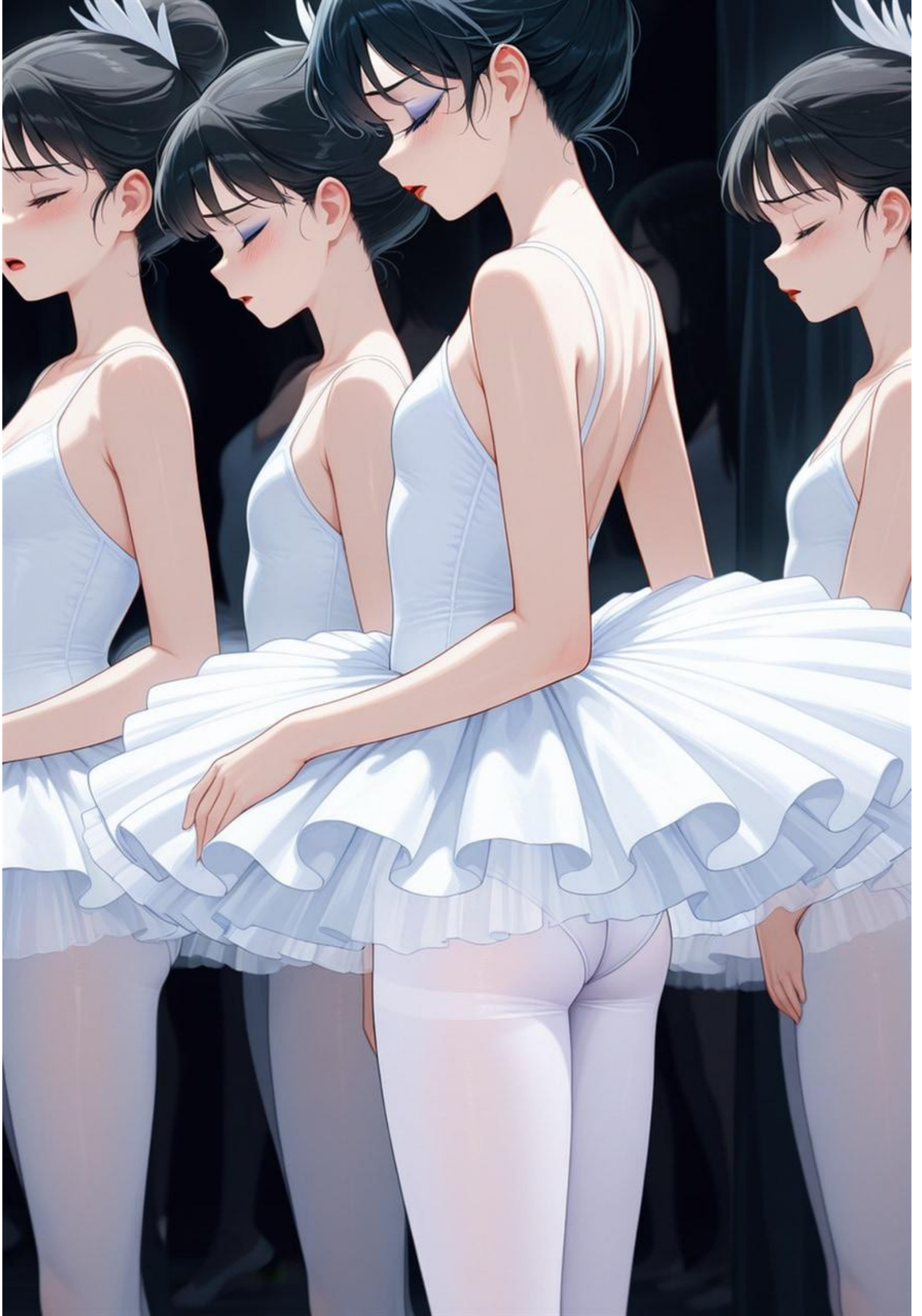
ステージパフォーマーの衣装を着せられて待機させられているということは、次に何をやらされるのかは明白だった。

いよいよ「その時」が来たらしい。

「少女たち」は次々に立ち上がった。

そして身体は勝手に動き、
ステージ前の廊下へと歩み出ていく。

言うまでもなく、オレも
その中の一人だ。



まばゆいライトの下に
「踊り子」たちは一斉に
飛び出した。

多くの生徒たちは、また学校のお仕着せによる退屈な舞台でも見せられると思っていた。
だが、そもそもの最初から猛烈な違和感を感じてしまっていたという。

綺麗な舞台衣装に身を包んだ可憐な細身の美少女ダンサーはそれはそれは美しかった。
ダンスも見事なものだった。
…だが、そこには違和感があった。

綺麗なバレリーナさんたちにうっとりする予定だった女子たちも、ただならぬ雰囲気となる。
客席には動揺が広がり、先ほどの「男子たちのバレリーナ化騒動」がひそひそ話のレベルを超えてささやかれ始めた。

中でも特に艶めかしく妖艶な表情で
踊るバレリーナが自然と注目を集めていた。
そしてとある女子がとんでもないことを言い出した。

ねえ…あのバレリーナって…
真宮寺さん…
じゃないよね……

実にバカバカしい話だ。
真宮寺明彦といえば、眉目秀麗、頭脳明晰、スポーツ万能の色男。言ってみれば「男の中の男」だ。
それが可憐なバレリーナなど、かけ離れた話だ。しかし、先ほどの京都市内での男子のバレリーナ化に真宮寺も巻き込まれたのでは…？という疑惑が広がった。

そしてその推測は不幸にも的中していた。
可憐に舞い踊るバレリーナの
内の一人は、
確かに真宮寺明彦その人だったのだ。

嗚呼そんな…身体が勝手に動いて…
踊って…しまうぅ…。
ど、どうしてオレが女の身体に性転換された
上に、こんな恥ずかしい恰好で公衆の面前で
バレエを踊らされなくてはならないんだ…。
真宮寺家末代までの恥辱だ…。

だ、大体何なんだこの衣装は！
こ、こんな最初からまくれあがったスカートではただ動いただけでパンツ部分が丸見えではないかぁ！

い、一体どこの誰がオレたちを操っているのか知らないが、もういいだろう！十分だろう！？
もうやめさせてくれ！誰か助けてくれぇえええ！

確かにうっとりするほど
美しい舞台ではある。

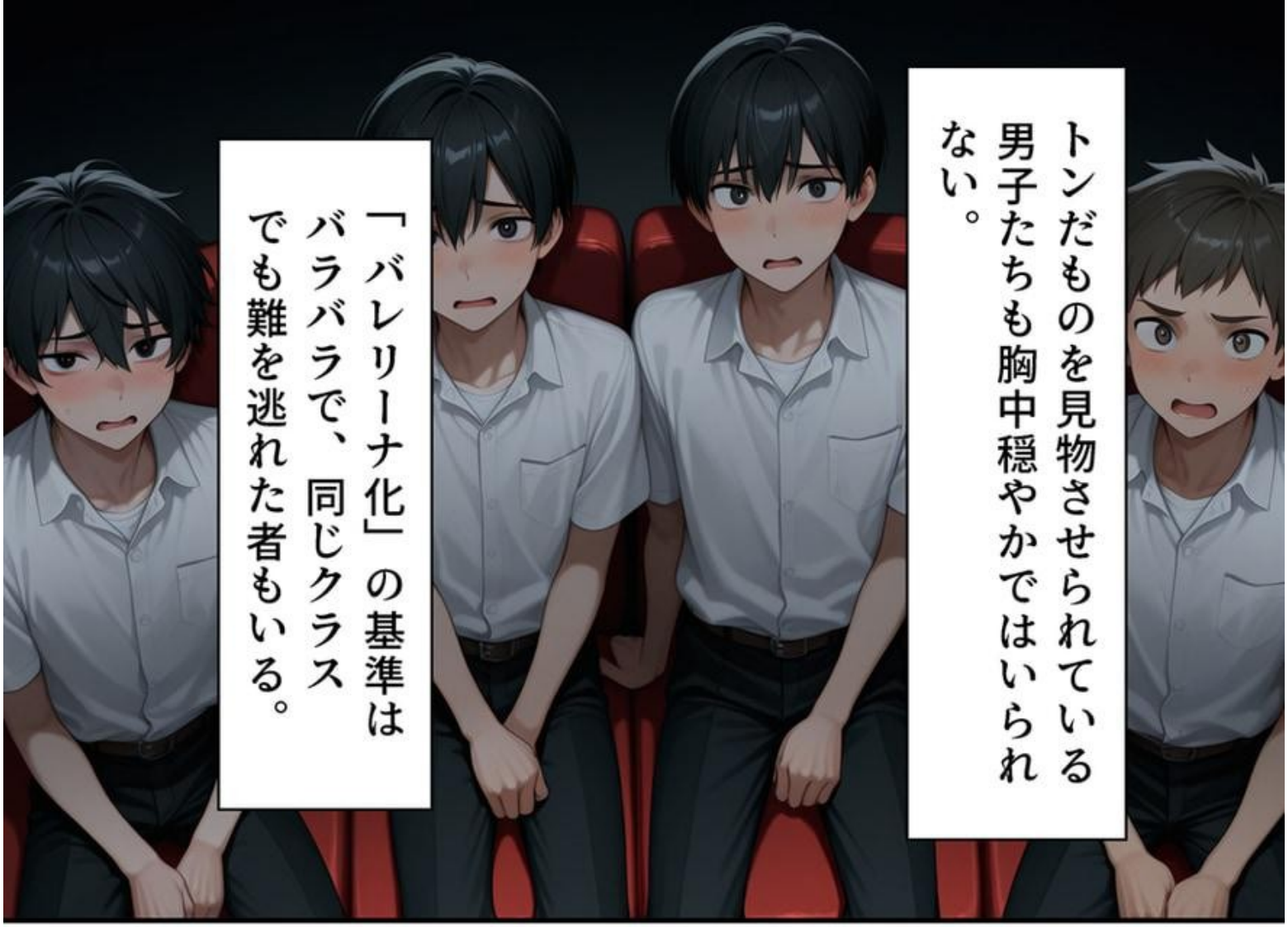
しかし、ぬぐえぬ違和感
が支配する。

それはバレリーナたちの
「悩ましさ」を超えた
「苦悶」と「恥辱」の
表情だった。
まるで「バレリーナであること」そのものが恥ずかしくてたまらないかの如くだったのだ。

観客席に座らされている
生徒たちの内かなりの
人数が、先ほどの京都市内のバレリーナ
変身を思い出し、恐ろしい結論に到達
しつつあった。

今、女として目の前で舞い踊っている「バレリーナ」
たちはついさっきまで自分たちのクラスメートだった
「男」たちの変身させられた姿なのではないか…と。

もし本当にそうであるならば、
その恥ずかしさも納得というものだ。
男にとって女装させられるだけでも
屈辱なのに、しっかりメイクさせられ
て女の踊りを踊らされていることに
なるのだ。


トンだものを見物させられている男子たちも胸中穏やかではいられない。
「バレリーナ化」の基準はバラバラで、同じクラスでも難を逃れた者もいる。

まかり間違えば自分たちもあの女たちの群れに放り込まれていたかもしれないのだ。

剛田竜牙もまた、同じクラスでありながらバレリーナ化を免れている。

剛田と真宮寺と言えば、方向性こそ違えども共に「男らしさ」を競っているような間柄だ。

それが方や「バレリーナ」では少なくとも「男らしさ対決」では「勝負あり」だ。

ましてや真宮寺は身体も女になっているのだ。

一ノ瀬結花にとってみれば、どれほど人気者であろうとも、真宮寺明彦は自分を集団で襲おうとしたクソ野郎である。

そんな奴がどうなろうとどうせもいい。きっと、女にされてバレエを踊らされるのはさぞ屈辱なんだろうが、因果応報、いい気味だとしか思えない。

しかし、一ノ瀬にはそれ以外に気になる踊り子がいた。

そのダンサーは一人で踊っていることが多い真宮寺と違い、群衆に紛れる様に悩ましい表情で踊っていた。
一ノ瀬の目から見てもとても美しかった。

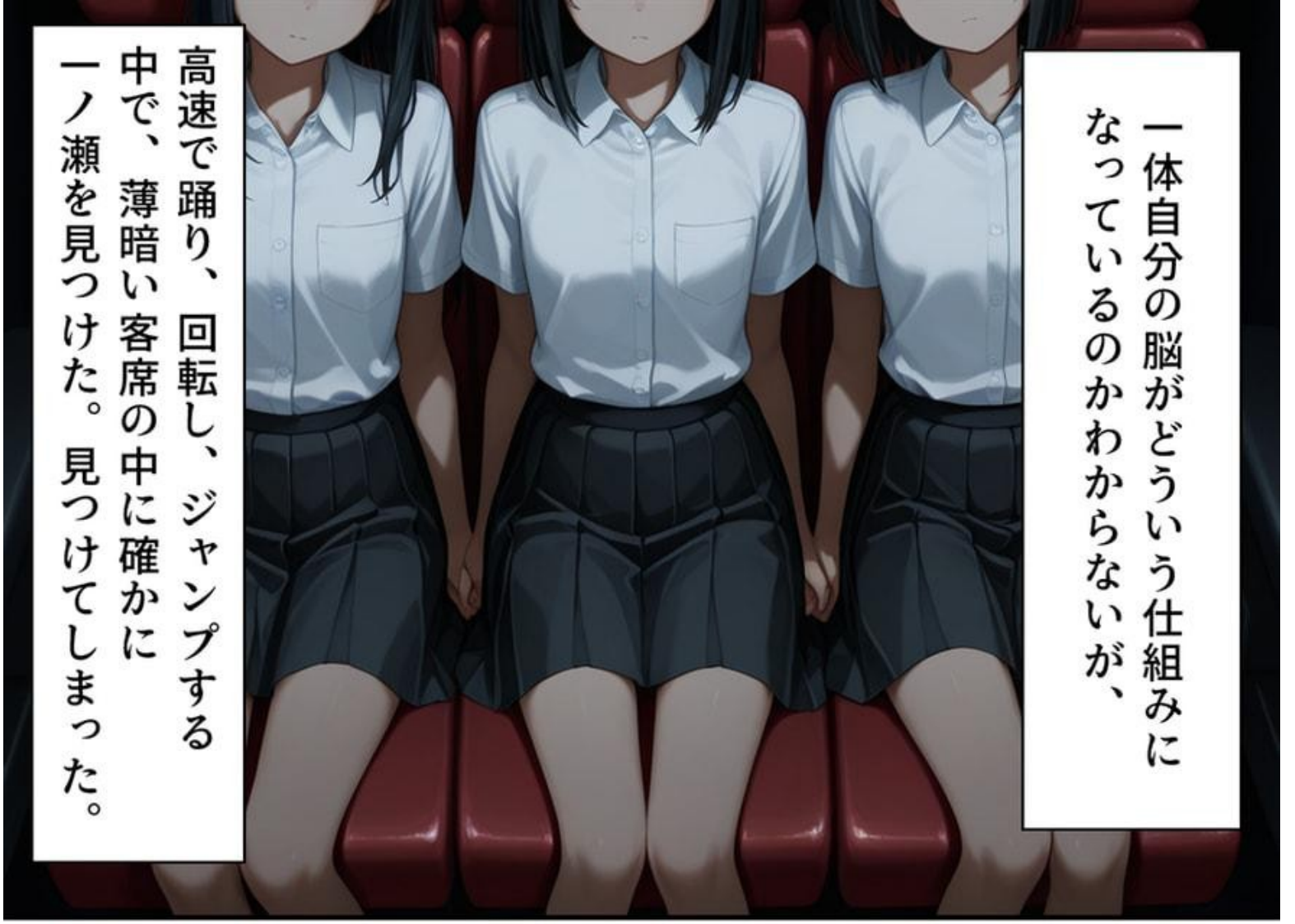
間違いなく面影がある。あれってまさか…
白鳥…じゃないよね…。と一ノ瀬は思った。
今回の騒動を考えるに、真宮寺すら変身している以上、白鳥も巻き込まれている可能性は大いにあった。

そして残念ながらその予感は的中してしまっていた。
美しい踊り子として可憐に舞い踊らされていたのは、白鳥渚その人だったのだ。

一ノ瀬結花は怒っていた。

この会場の中では、変身させられたバレリーナを除く人間として恐らく一番怒っていた。真宮寺みたいなクソ野郎が言ってみれば天誅として「女にされ」るのは分かる。女を襲おうとし、そして襲ってきた人間だからだ。しかし、どうしてそれに白鳥やクラスメートのみんなが巻き込まれなくてはいけないのかと。

白鳥渚は気づいていた。
一体どんなからくりなのか
分からないが、この会場の
観客席にいるのは、同じ学校
の生徒たちであるようだ。…ということは
恐らく一ノ瀬たちもあの中にいる。
そんな…なんてことだ…。


一体自分の脳がどういう仕組みになっているのかわからないが、
高速で踊り、回転し、ジャンプする中で、薄暗い客席の中に確かに一ノ瀬を見つけた。見つけてしまった。

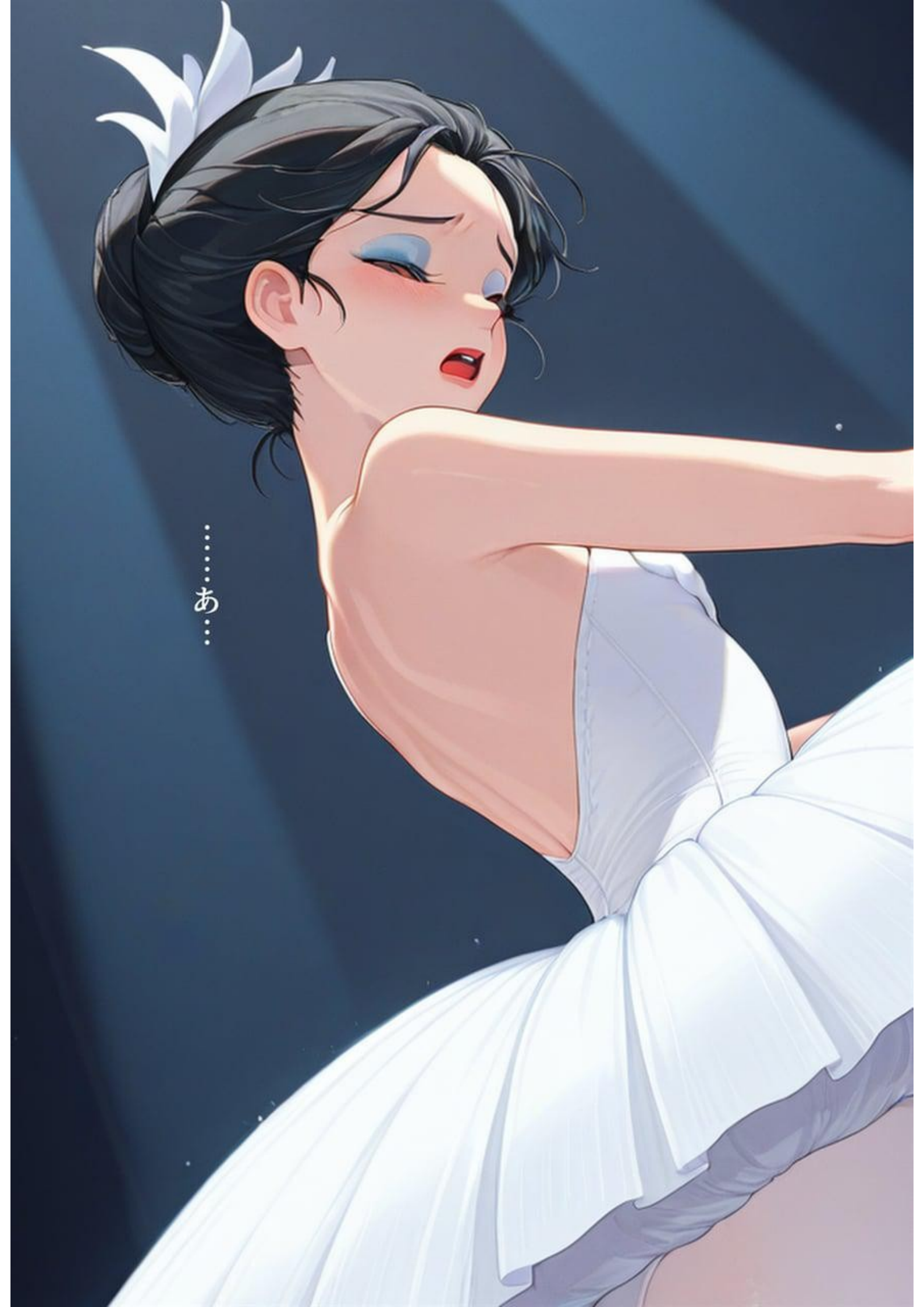
ほんの一瞬だったが、恐らく間違いない。あれは一ノ瀬だ。
何故か物凄く怒っている様にも見えた。

いや、ある意味怒るのも
当然かもしれない。
少し前に「男として」
好きだ付き合ってくれと
言ってきた人間が、バレ
リーナとして目の前で
踊っているとなれば、
女の側からすれば
「一体どういうつもりなのか」
と言いたくもなるだろう。

嗚呼、でも違う！違うんだ一ノ瀬ぇ！
オレだってこんなカッコしたくない！
でも服まで勝手に変形しちまったんだ！
好きでこんなカッコしてるんじゃないんだぁ！

い、一ノ瀬ぇ！
だからオレのことを
変態認定するのは
ちょっと待ってくれ！
こ、このメイクだって勝手に
顔の上に湧き出てきたんだよ！
踊りだって身体が勝手に動いて踊ってしまうんであって、
自分から望んでバレリーナとしてバレエを踊りたいわけじゃ
ないんだよぉおおお！！

だ、だから…
オレのこの恥ずかしい恰好を
見ないで…見ないで…くれぉおおおお！！


……あ……

「舞台と観客」関係がかろうじて成立していたのは、舞台が始まってすぐまでだった。
「異常」を察知した生徒たちが騒ぎ始め、洗脳が解けたのか駆け回り始めた。

「洗脳」が解けたのか、バレリーナたちは
次々に踊るのをやめた。

身体が勝手に踊ることこそ無くなった「少女たち」だが、変わり果てた姿という現実は変わらない。
呆然と立ち尽くす以外にどうしようもなかった。

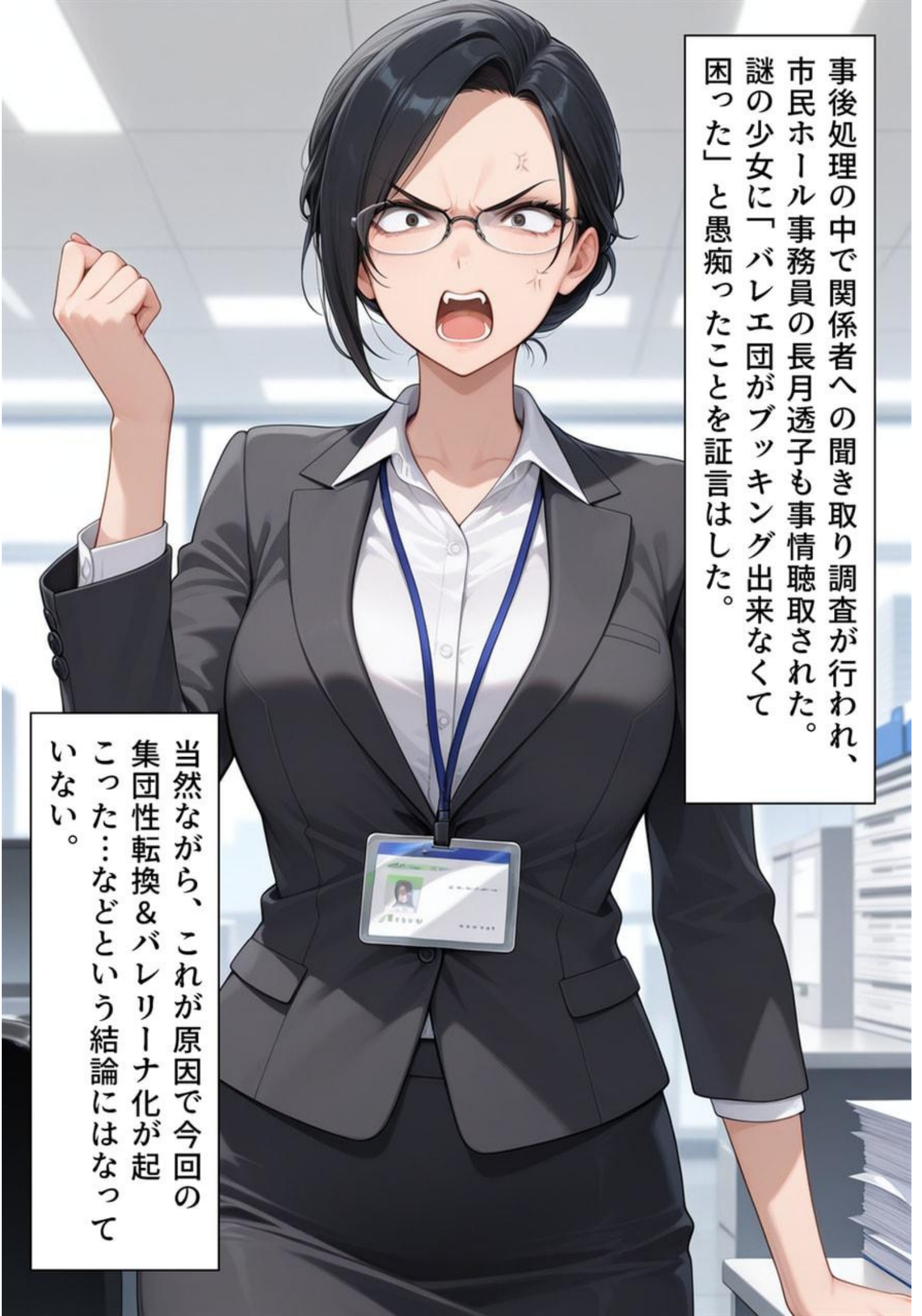
混乱の中、一ノ瀬はステージに上がってきていた。
白鳥…だよね…？

い…一ノ瀬…。

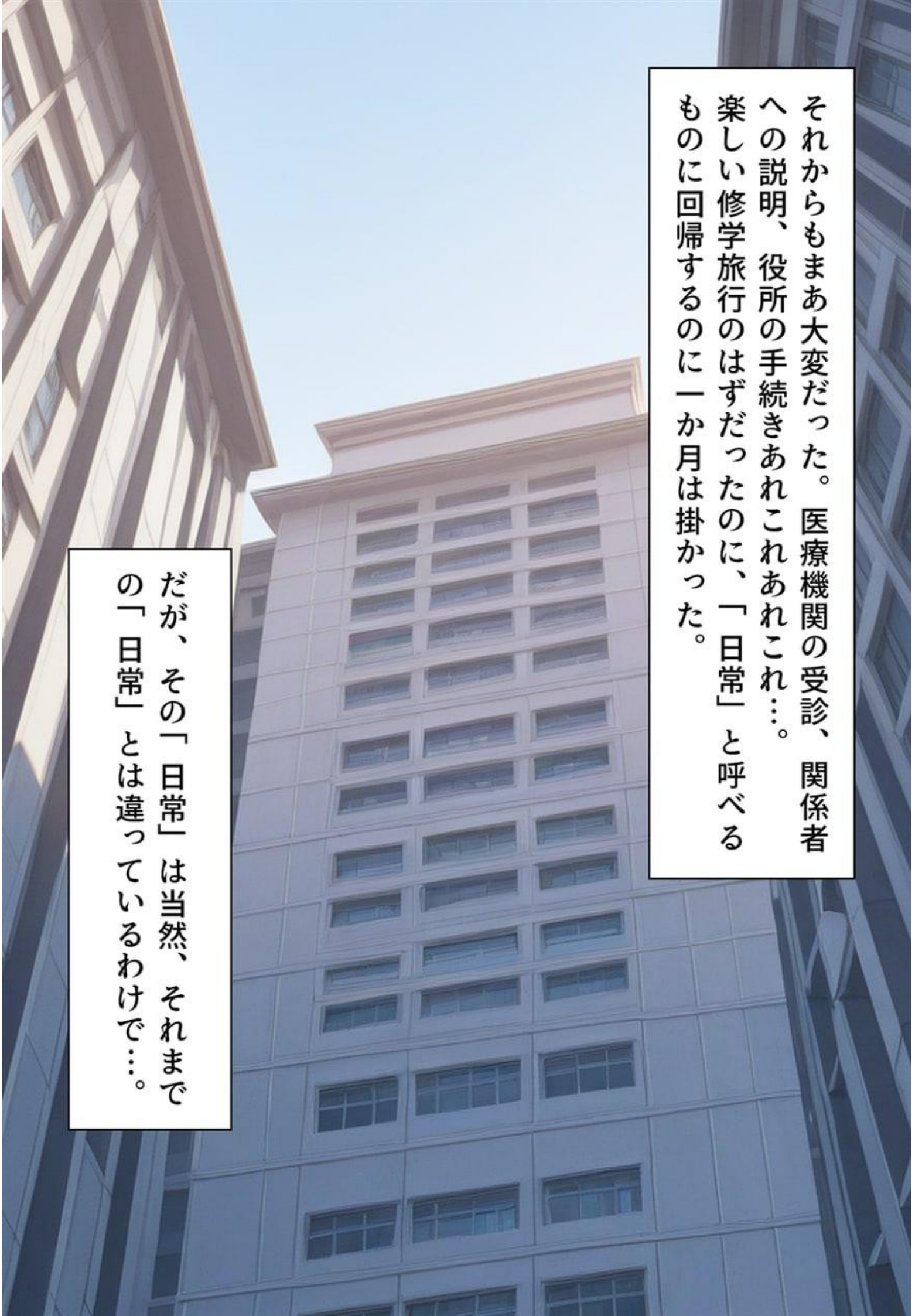
踊るのをやめることが出来たとはいえ、ここからの「後始末」は本当に大変だった。
そりゃもう本当に大変だった。

これが洗脳・強制女装だけだったらいい。だがそうではない。

バレリーナにされた被害者の少年たちは全員が女への性転換も伴っていた。
その精神的ケアも必要になってくる。


事後処理の中で関係者への聞き取り調査が行われ、
市民ホール事務員の長月透子も事情聴取された。
謎の少女に「バレエ団がブッキング出来なくて
困った」と愚痴ったことを証言はした。
当然ながら、これが原因で今回の
集団性転換&バレリーナ化が起
こった…などという結論にはなっ
ていない。

話を被害者たちに戻すと、彼ら…いや、もう彼女ら…は地元から遠く離れた地で着ていた服も何も消失した上にこの有様である。
宿泊先に置いてあった着替えを使うことでどうにか当面の危機を脱し、地元に戻ることになる。


それからもまあ大変だった。医療機関の受診、関係者への説明、役所の手続きあれこれあれこれ…。
楽しい修学旅行のはずだったのに、「日常」と呼べるものに回帰するのに一か月は掛かった。
だが、その「日常」は当然、それまでの「日常」とは違っているわけで…。

オレは「女子高生」となっていた。
どうやら男に戻れそうになかったし、
女であることを受け入れて生活し始めた。
ブラジャーをし、パンティを履き、スカートを
身に着けて登校する生活を始めるしかなかった。

あ、おはよう渚。
以前は「白鳥」と苗字で呼んでいたが、「女同士」となったことで心理的距離が近づいたのか「渚」と下の名前で呼んでくれる一ノ瀬。

一ノ瀬はもう女子同士のスキンシップをしてくる。
全く…こちとらまだスカートにも慣れてないってのに…。

女子化を泣いて嫌がってる様に見えた佐藤は、今やすっかりなじんじゃってる。女子になっても視力は変わらないみたいだ（笑）。
元々素養はあったのか、元男子の中では一番おしゃれを楽しんでいるとの噂だ。

女子高生同士話す姿はもう生まれつきにしか見えない。

もちろん全員が状況を受け入れたわけではない。例えば真宮寺は少なくとも同校においては女子の制服で復帰することは無かった。

男子の制服の着こなしにすら細部をハイブランドでキメていた色男が公衆の面前で「バレリーナ」では面目丸つぶれなのでそのショックなのかそれっきりとなった。現在どうしているのかはわからない。

そんな新しい「日常生活」が到来するさなか、
オレはまたレッスン場に一ノ瀬のバレエを見学
させてもらいに来ていた。
以前に訪問させてもらった時には、次に来る時には
スカートを履いてるだなんて想像もつかなかった。
そして、「違い」はそれだけじゃなかった。

結論から言うと、オレはバレエを習い始めた。

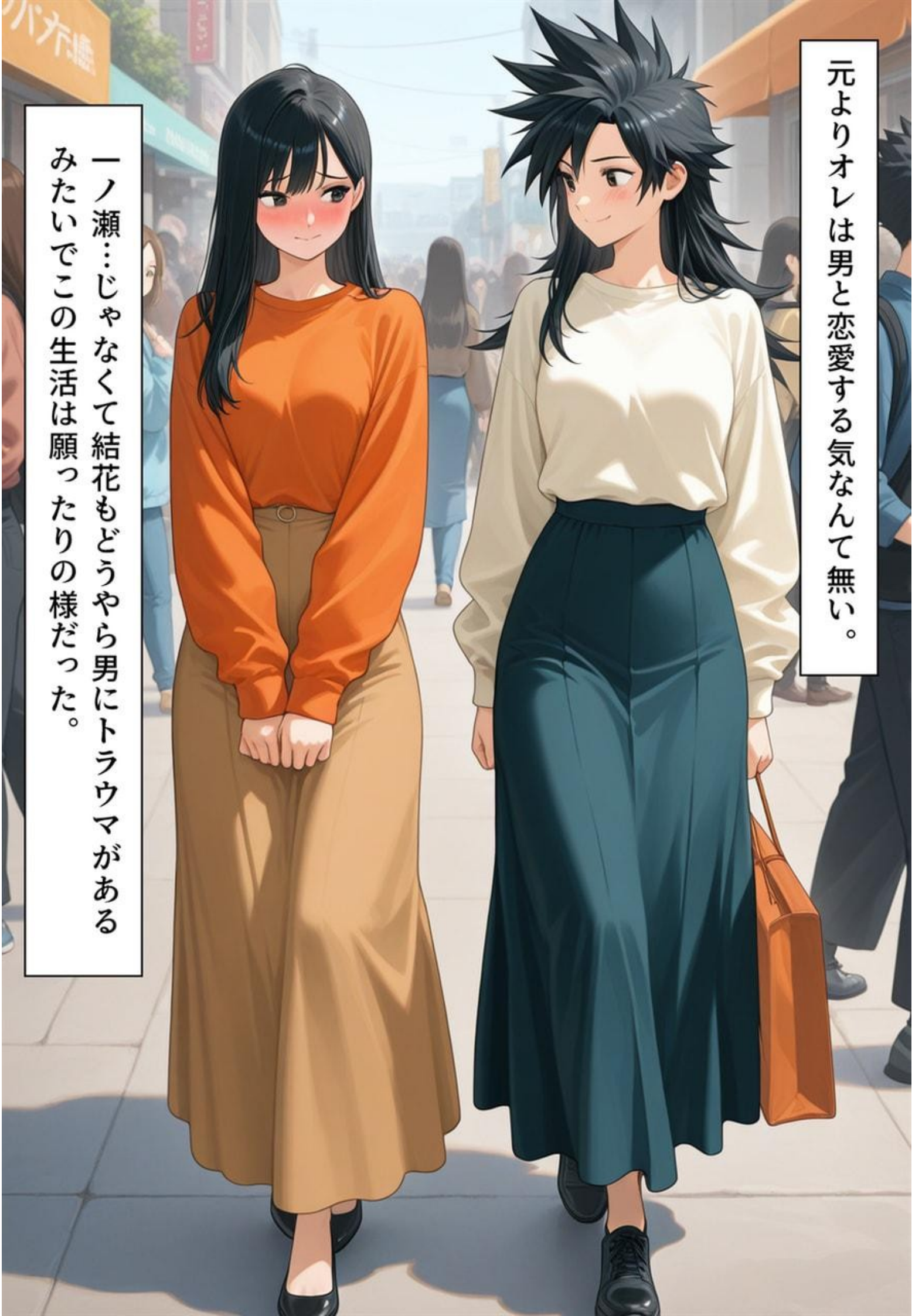
バレエに限った話ではないが、全くの未経験者が高校生にもなって始めて大勢するようなものではない。
だが、先日の騒動に巻き込まれたオレには必然的に「ある程度踊れる女」にされてしまったみたいだった。

オレはあの日泣いて嫌がっていたはずのバレリーナのチュチュに自ら袖を通していた（袖無いけど）。当然、そんなことをしている元少年はいない。
一ノ瀬と同じく女子高生とバレリーナの二重生活をし、一ノ瀬には及ばないが個人タイトルまで獲得するようになっていた。

男と女だった時に恋人寸前にまで行ったオレたちは、共にバレリーナとしてキャリアを積むことになった。

「女子」として共に卒業した
オレたちはダンサーとして
世界を飛び回る生活になった。

いちいち示し合わせて会うのが面倒くさくなったオレたちは同棲を始めた。


元よりオレは男と恋愛する気なんて無い。
一ノ瀬…じゃなくて結花もどうやら男にトラウマがあるみたいでこの生活は願ったりの様だった。

オレの身体は女になってしまったが、一ノ瀬とは
「恋人」になることが出来た。出来てしまった。

オレたちは「正式に」結婚した。

そうなのだ。オレは何か引き返せなくなる気がして、
戸籍の性別変更を行っていなかった。
なので、肉体的には女でも、法律上はまだ「男」のままなのだ。なので生まれつき女である一ノ瀬…
もとい結花と結婚することは何も問題が無い。

肉体的には「女同士」なので、
決して「祝福された結婚」では
無かったかもしれないが、オレ
たちは満足だった。

女同士なので子はなせないので、
里子をもらった。ママ二人という
特殊な状況だが、きっと理解して
くれるだろう。

残念ながらにわかバレリーナだった
オレは一ノ瀬ほどの才能は無く、
怪我を機に一ノ瀬のマネージャー
として生きていくことにした。

そんなこんなで親子女三人末永く
仲良く暮らしましたとさ。

…ってなことになってたらそれはそれで
面白かったんだろうけど…そうはならな
かったんだよなあ…。

じゃあ、オレと一ノ瀬が百合ップル
になって家庭を築いて云々というのは
何だったかというと…まあ、妄想だよ。

でも、ステージ上でバレリーナ姿で
一ノ瀬と相対した時にはもうダメだ
と観念したよね。
こんな姿を見られた恥ずかしさもあったけど、
これから先は「女子高生同士」になっちまうこと
を覚悟したときに一瞬で脳内に妄想が駆け巡った。

しかしそうはならなかった。会場が大混乱し、一ノ瀬がステージに乗り込んできたタイミングで、「魔法が解ける」様に元に戻ったのだ。
うっとりするほど美しかったバレリーナさんは間抜け面の男子高校生に戻ってしまった。

白鳥…一ノ瀬ぇ…
佐藤もまた、変身前の姿に戻っていた。
リュックすらチュチュに収納されていたのだろうか（？）。

急に元に戻った「少年たち」はまだ女体…とそしてバレリーナ衣装の余韻が残っていた。

かなり長期間、その「感触」は残ったままだったという。

バレエのステージはその後なだれ込んできた
生徒たちにより有耶無耶となった。
基本的にはバレリーナになった全男子生徒が
元に戻ったことで「無事解決」ということに
なった。実際問題そうするしかなかった。

あんな騒動があった後ではあったが、
拍子抜けするほどあっけなく日常生活
は戻ってきた。
あれは夢だったんだろう…という
ことで男子も女子も落ち着いた。

一ノ瀬はこれまで
と同じく学園生活
とレッスン、そして
大きな国際大会を往復
する生活を続けた。

ただ一点、明確に違うのが
真宮寺と、その「取り巻き」の一群
だけはいなくなっていたことだった。
バレリーナと化して一緒に踊っていた
ことは多くの男子が確認している。
だが、その後については誰も知って
いる者はいなかった。
帰りのバスにも乗っていなかった
ことが分かっている。

一説にはこの騒動によって、
真宮寺とその取り巻きだけは
バレリーナから男に戻れなかった
と言われている。
正直、よくない噂も多い
奴だったので一部では
いい気味だとする声も
あった。

そしてあの騒動以来、吹っ切れたのか
一ノ瀬とは公認カップルとなった。
どうも真宮寺とは何かあったみたい
だけど、それだけは教えてくれなかった。

オレもこんな美少女バレリーナと付き合えてうれしいのだが、困るのは頻繁に「あの話題」でこっちをからかってくることだ。
…え？…

チュチュとトゥシューズの着心地はいかがでしたか？渚さん？
そんなこと言われても照れて黙りこむしかない。意外とサドっ気がある子なのかもしれない。

そんなこんなで今回の騒動は一部の悪意を持った「輩」の排除と、そして一部のいたいけな「男子」たちによりによって「バレリーナ」を肉体ごと体験させ、ある種のトラウマを植え付けて終わった。余りにも現実離れしていたため、今でも現実だったのか何だかわからない。

きっと将来は笑い話になるのだろう。

ということでこの物語はここで終わる。

終

あとがき　真城悠

子供のころ、定番の「女装」といえば、セーラー服とそして「バレリーナのチュチュ」でした。恐らくそれは「8時だヨ！全員集合！」（1969-1985）の影響も大きかったと思われます。

個人的にはとにかくもう「名状しがたい」としか言えない唯一無二のフォルムから目が離せません。

どうやらそれは海外でも事情は同じらしく「男性メンバーのみで構成されたバレエ団」を謳う団体が複数存在します。

それはとりもなおさず「男性がバレリーナの衣装で女装して踊りますよ」ということが「売り」になっていることに他ならないわけです。

まるで鶏が先か卵が先か論争みたいですが、私は「全員集合！」でバレリーナ女装が出るのかどうかに一生懸命注目して見ていた覚えがあります。

半裸に近い薄着の衣装に、申し訳程度のスカート、体形の浮き出すフォルムとまるで男性の目の保養のために作られたかの様な衣装にも見えます。

実際それはそれほど的外れではなくオペラなどと並んで貴族の観劇する趣味ですから、当然そうした要望はある程度反映されています。

そんな中、筆者にトラウマを植え付ける作品が放送されました。それがアニメ「うる星やつら」の「第139話 愛と闘魂！グローブVSパンツの決闘！！」（1984年6月20日放送）でした。

コミックの原作通りに進むのは前半までで後半のアニメオリジナル部分が正にトンでもなかったのです。

前半ではそれほど本筋に絡んでいなかった二枚目の立ち位置でありながらコメディリリーフでもある面堂終太郎が突如、ほぼ何の脈絡もなく「バレリーナのチュチュ」姿で現れるのです。

一応「呪われたトゥシューズ」に「取り憑かれた」ために「踊って踊って踊りまくらなくては成仏できない」…という理由付けはされていましたが、実際には「面堂をバレリーナ女装させるため」の方便にしか過ぎないでしょう。

劇中でも触れましたが、同時に「女の子のあこがれ」の存在でもあります。これは「バニーガールの衣装」などではありえない現象ですから、やはりかなり特殊な立ち位置の衣装だと思います。

ともあれ、この衣装ほど「コテコテの女装」に似合う衣装もありません。男性コメディアンが白銀のクラシック・チュチュで飛び出してくれれば間違いなくある程度の「笑い」は取れてしまいます。

中でもこの面堂終太郎という「二枚目」が「バレリーナの恰好で公衆の面前で踊らされる」という展開は「戦慄」しました。

改めて見てみると分かるのですが、実にプリミティブに「女装」のみを前面に押し立てて「どうです！トンでもないでしょ！」とやっている感じがします。

作画レベルが平均的に高いとは言えない同作にあってもなかなか辛い回で、チュチュはまるで練習着みたいですし、髪飾りも何もなし。でもバレエの動きはなかなか頑張っていました。すみません偉そうで。

話を戻しますが、ある意味においてバニーガールやウェディングドレスに匹敵するほど「いかにも女性らしい」この衣装は「強制女装」させるにはうってつけのアイテムでもあります。

ですので、いつかはメインモチーフとして採用する機会を伺っていました。

当時（1984年）の制作事情は推測するしかありませんが、「うる星やつら」はあらゆるタブーを破った破天荒アニメです。

中でも209話存在するTVシリーズ（1981年放送の旧シリーズのみを指す）の中で実に「19回」にも及ぶ、「女装・入れ替わり・女体化」が「タブー破り」のトップの位置を占めていたと言って間違いないと思うのです。

実際、「うる星やつら3大TS回」だと思っている。「原生動物の逆襲!プールサイドは大騒ぎ」（1984年8月25日放送）と「幸福押し売り!?ピントはずれの青い鳥!!」（1985年9月4日放送）に題材をとった同人誌は既に作成・発売していました。

「次はグローブ対パンツ（つまりバレリーナだ！）」とずっと考えていたのです。

しかし、当時使っていた画像生成エンジンの「モデル」がどうしても私が求めるクオリティの「チュチュ」を出力してくれません。

どんなプロンプトを入力しても、Loraを使ってもダメでした。

ところがXLのイラストリアスモデルで理想的なチュチュが出力されることが分かり、無事に完成・発売の運びとなりました。

今回のサブタイトル「トゥシューズを履かされた男たち」は忘れもしない、中学次代の修学旅行先のホテルのTVから流れてきたフレーズでした。

恐らくその地元にどこかのバレエ団が公演に来ていたのでしょう。そこでバレリーナ姿に扮した男性ダンサーによる演目が予定されていたのだと思います。

いやというよりは、普段は普通の（？）バレエ公演を行っているけど、今回は女装のみで行きますよ…というニュアンスでした。

何しろオスガキ連中のみで雑魚寝から起き上がって布団を畳まされている真っ最中に一瞬だけ見たＣＭですので詳細は不明。インターネットなんて影も形もない時代です。

とにかく「トゥシューズを履いた男たち」というフレーズが余りにも詩的かつ刺激的でした。

その後、とあるドキュメンタリーをこれまたチラ見したのですが、その時画面には色とりどりの美しい衣装を着た男女のバレエダンサーが可憐に舞い踊っていました。

そしてそこにナレーションが被さったのです。

『このバレエ団は、男性のみで構成されています』

…つまり、あの美しい男女カップルの集団に見えるバレエダンサーたちの「女役」の人たちも一人残らず男ってことなの！？…と。

ある意味において「全員がバレリーナに女装しているバレエ団」よりも刺激的なビジョン、イメージでした。

歌舞伎などでは「父親」が自分の「妻役」を演じることもあるそうですが、男性の同僚をバレリーナとして腰をささえて回転させる気分はどうなのか…。

いや、それよりも何よりも、いくら「仕事」とはいえ、綺麗にバレリーナとして着飾って、恐らく日常生活においては「おれ、お前」の関係であろう「男」によってリフトアップ（持ち上げ）られて、くるくると回転し、顔をのけぞらせて恍惚の表情をしなくてはならないのは一体どんな気持ちなのか…と思わず考えてしまったのです。

そしてその時に同時に浮かんで来たのが「楽屋」の風景でした。仮にプロのバレエダンサーとして働いていて「次の公演はお前、女役な」と言われたら一体どうすればいいのかと。

仕事なので仕方なくチュチュを着てメイクした状態の「同僚」とお互いに顔を見合わせた時の気まずさ…みたいなものが脳内にイメージとして流れ込んできたのです。

ですので、今回の作品を作る目的の最大のそれが「バレリーナ姿で楽屋に集合させられている（元）男の子たち」というシチュエーションを「絵にする」ことでした。

これまた従来のモデルではなかなか難しいものだったので、今回かなり満足のいく絵が出来たと思っています。男性読者の皆さんもバレリーナにされて、バレリーナだらけの楽屋に待機させられたら…とか思うでしょ？

また、今回は恐らく世界中に私一人しか愛好家のいない「集団性転換パニック」ものでもあります。

過去には「青い鳥」に材を取った「ブルーバード　集団性転換＆強制女装パニック！」という「集団性転換パニック」ものを作っています。この時は「現代風の高校生の制服」がメインでした。

とある高校で、老若男女関わらず全員がバニーガールにされる「恐怖のバニーガール化現象　戦慄の集団性転換パニック！」とかセーラー服中心で

うる星やつらの「青い鳥」がメインのモチーフなのでタイトルもそのまんまの「青い鳥の幸福　強制女体化・強制女装させられる男たち！」という作品も作っています。

また、偶然休日に学校で作業をしていた男子たちが純白のウェディングドレスの花嫁さんにされてしまう「エイト・チャンス　オレたちは女にされ「花嫁」にされた」ではウェディングドレスをモチーフにしています。

これらの作品で選ばれた衣装は、極論すれば単に「刺激的」だから選ばれたとしか言えません。

待望の新モデルを迎えて、満を持して「集団バニーガール化」のお話をリメイクした段階で「次はバレリーナ」でした。

最初はこれまで紹介した作品群と同じく「単なる衣装」として着せられる予定でした。

毎度「学園の日常から集団性転換パニックではマンネリ」だと考えていた私に「なら修学旅行中とかはどう？」と知恵を授けてくれたのは知人でした。

素晴らしいアイデアなので即採用だったのですが、どうにか衣装をもう少し有機的に物語に織り込めないかといざ走り出すまでに時間が掛かりました。

そこで思いついたのが、ちゃんとした職業バレリーナの子を重要な登場人物として出演させることでした。

そこに集団バレリーナ化が起これば面白い展開に出来るのではないかと。

ここは「あとがき」なのでネタバレしますが、今回の被害者の一部は「勧善懲悪」的に女にされる屈辱にまみれるので読者には痛快に見えてしまうかもしれません。私のモットーは「不条理」で、何の罪も責任も無い人がヒドい目に遭う話が好きなのでこれも実験的に試してみています。

また、これは「少年誌」に掲載される作品ではないので、「結局女になったっきり、元に戻ることは出来ませんでした」から一歩進んで「何だかんだで女として幸せに暮らしています」というオチにすることが多かったのですが、今回は珍しく「ちゃんと戻れる」展開となります。

これも読者の皆さんには感想を聞いてみたいところです。

また、私などは「生理的嫌悪感」を催し兼ねないほど男性のパーツを残しながら徐々に性転換していくビジュアルに興奮するところがあるのですが、「人類には早すぎる」ということなのか、余り人気がある展開ではないこともあって、今回もちゃんと「可愛い」レベルでお楽しみいただけるものになっていると自負しております。

余りにも素晴らしい没カットが日々量産されるため、今回も画集出します。

また、アダルト版も続いて制作予定です。

ではまた次回作にて。

（二〇二五年五月二四日（土）　真城　悠）